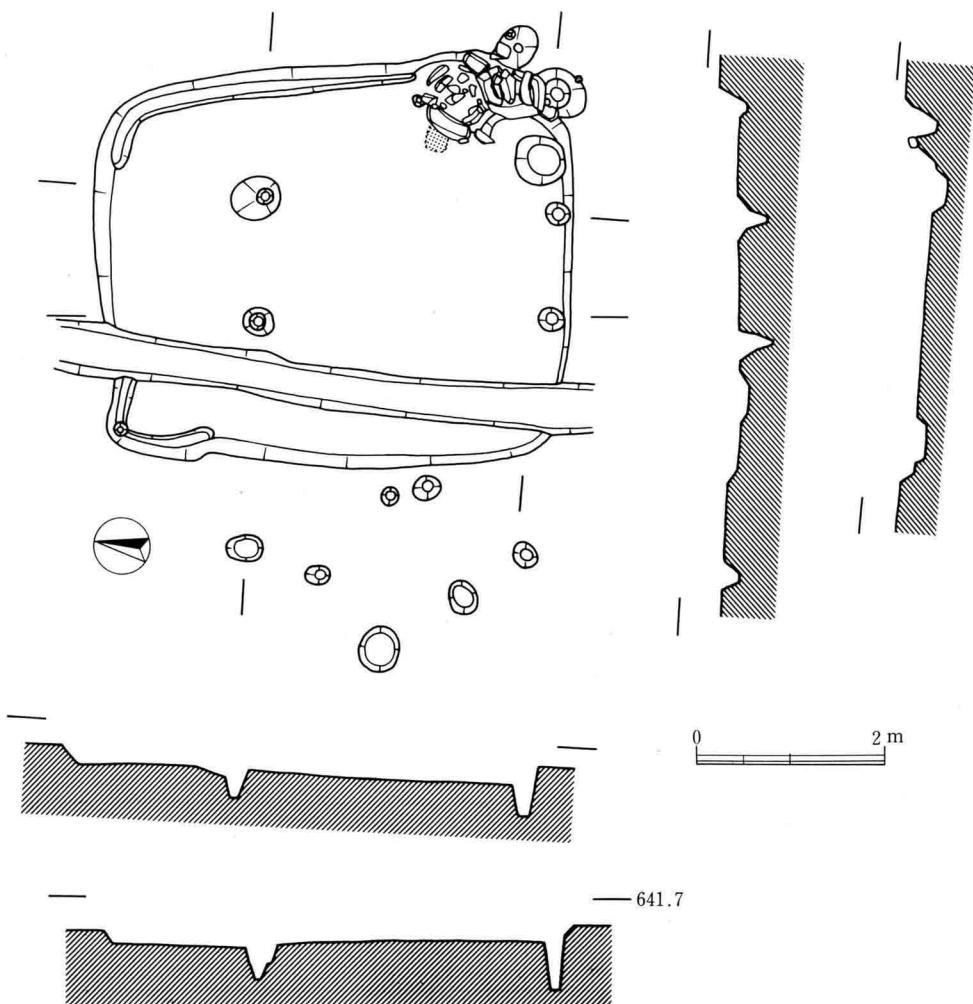


11号住居址

遺構（40・41図、III-38・39） 調査地中央付近の北側のやや西傾斜を有する平坦地より単独で検出された。

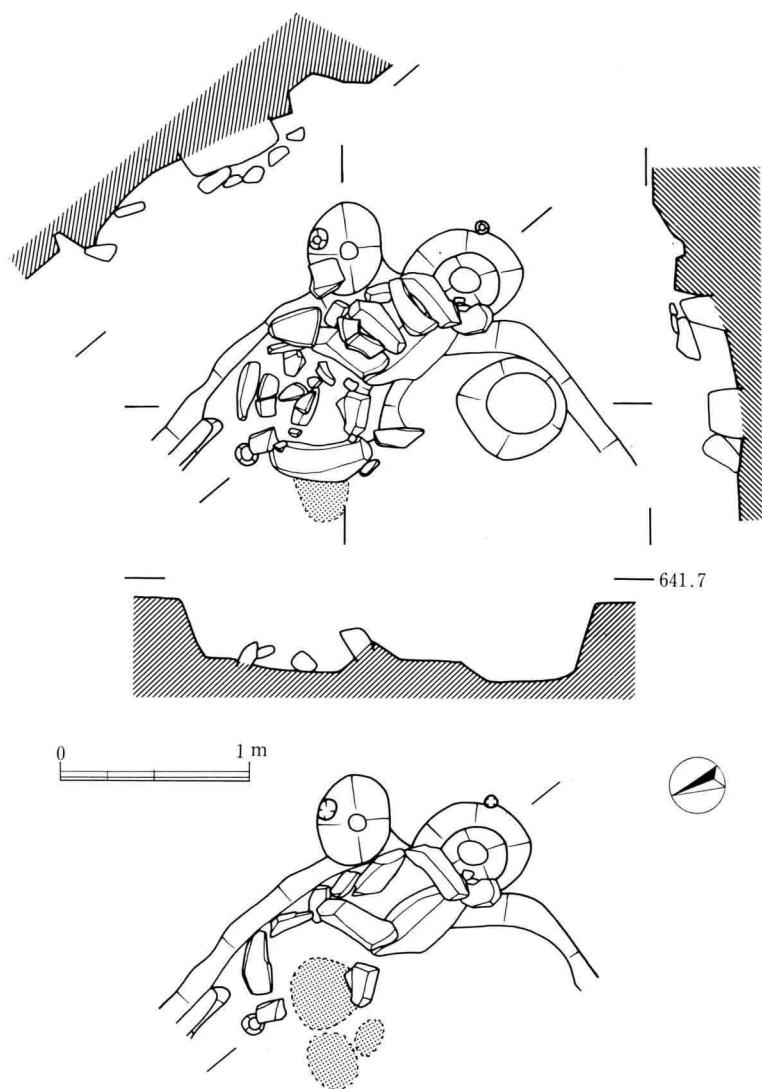
西壁付近の床面は近時の耕作により溝状の破壊を受ける。形態は隅丸長方形を呈すが、南東隅部にカマドが構築されているため、北壁が幾分短くなる。長軸外法5.1m・内法4.8m、東西軸中央部の外法4.1m・内法3.9mを測り、床面積約18.7m²の規模になる。長軸方向はN79°Eを指す。掘り込みは東・南・北壁共に25cm、西壁10cmを測る。主柱穴は南壁下2個、北壁側の2個をもってこれにあて、4個長方形配列になる。床面は中央付近が若干凹み、カマド前面から主柱穴内は堅緻である。カマドは残存状態が良好で石芯製両袖形態を基本とするが、他遺構のものと形態を異にする。調査所見では煙出部を東壁に設けていたものが、何らかの理由により南壁に折り曲げた様相がうかがわれる。それは左側の袖石が東壁に向いており、壁に接して配石があったにもかかわらず壁が焼土化していたことである。改変は東壁に平石を立て掛け、右袖にも大石の長軸を埋置し、煙道部に4個の角礫を架設し、隙間を小石で埋める。焚口部は両袖立石上に長軸54cmの大石を渡し、燃焼部空間を作り出す。カマドの主軸内法1.15m、焚口部内法幅35cm、燃焼部最大幅内法45cm、石組煙道外法70cmを測る規模になる。煙道先端は直径55cm程・深さ23cmの煙出ピットをもって終結する。この他の施設として東壁下と北西隅に幅15cm・深さ5cm程の周溝がある。本遺構の西に7個の柱穴を確認したが、小屋組配列にならない。

遺物(42図) 遺物の出土量は比較的多いが、小破片出土で完形品はない。器種には土師器壺(2~4)・椀(1・5)・盤形土器(11)・甕(7~10)・羽釜(12~14)、須恵器蓋(6)・甕、灰釉陶器椀がある。土師器壺はロクロで

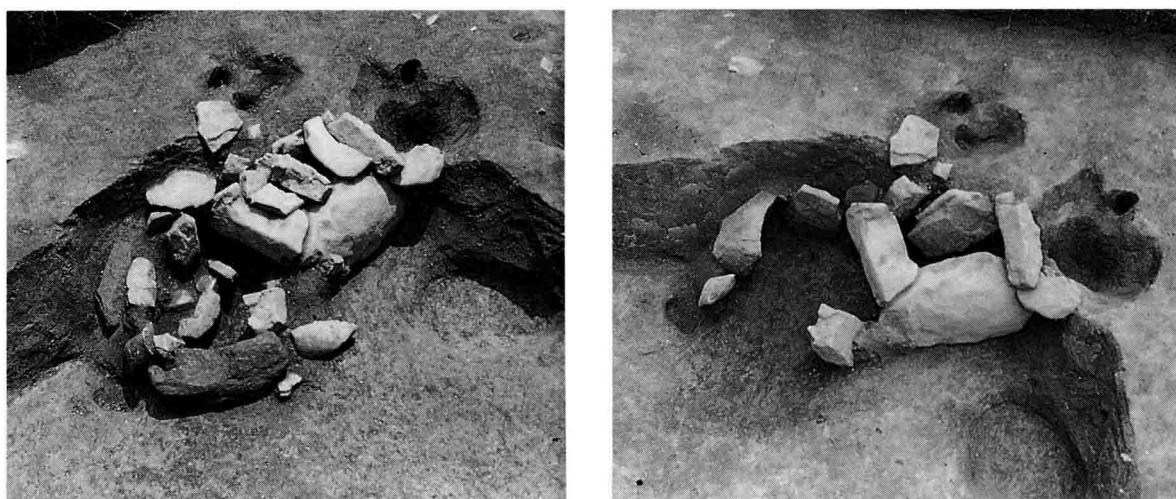


40図 11号住居址実測図 (1 : 80)

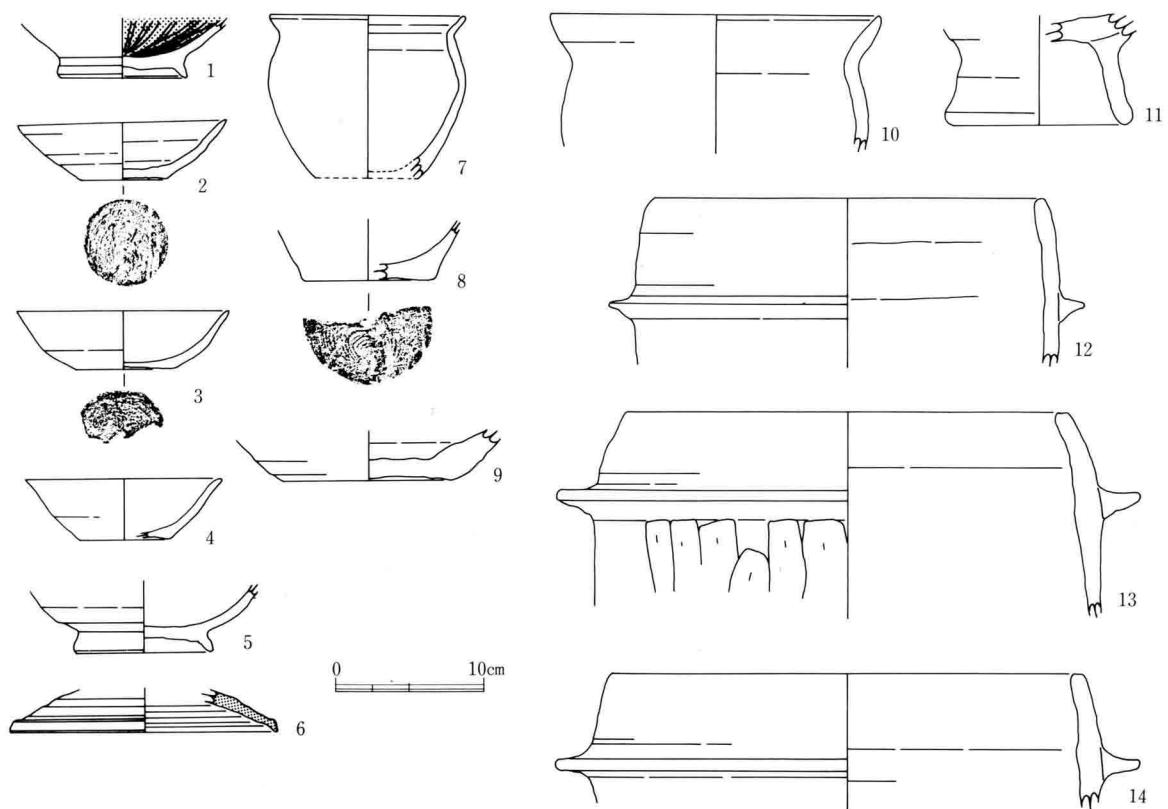
仕上げられ、内面はヘラミガキが施される。1の内面は黒色処理され放射状暗文を施す。羽釜は鍔が全周し、断面三角形を呈する。13の体部外面はヘラゲリ調整痕を残す。



41図 11号住居址カマド実測図 (1 : 40)



III-38 11号住居址カマド



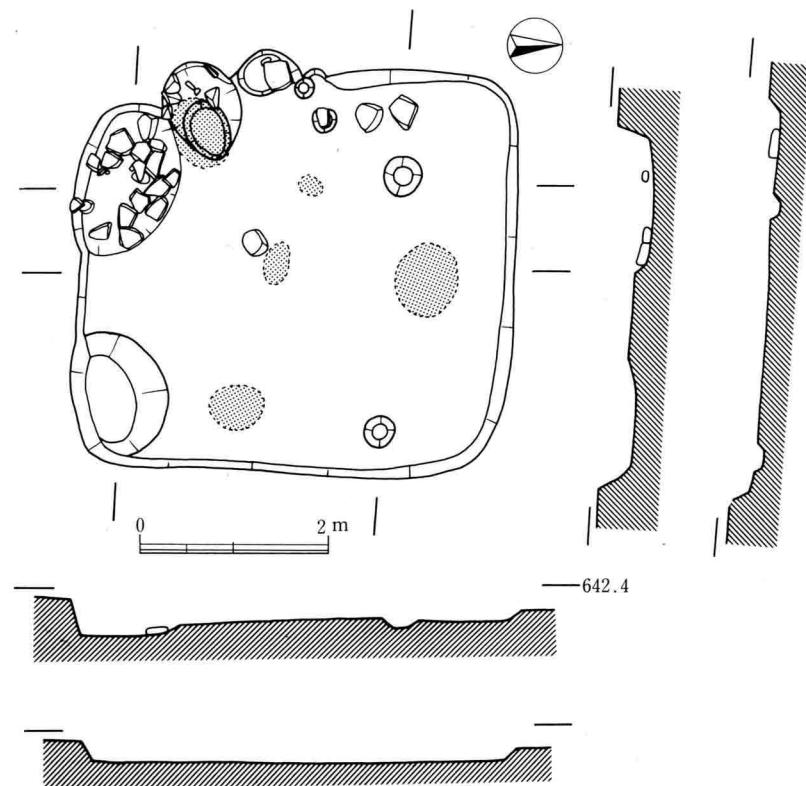
42図 11号住居址出土土器実測図（1：4）



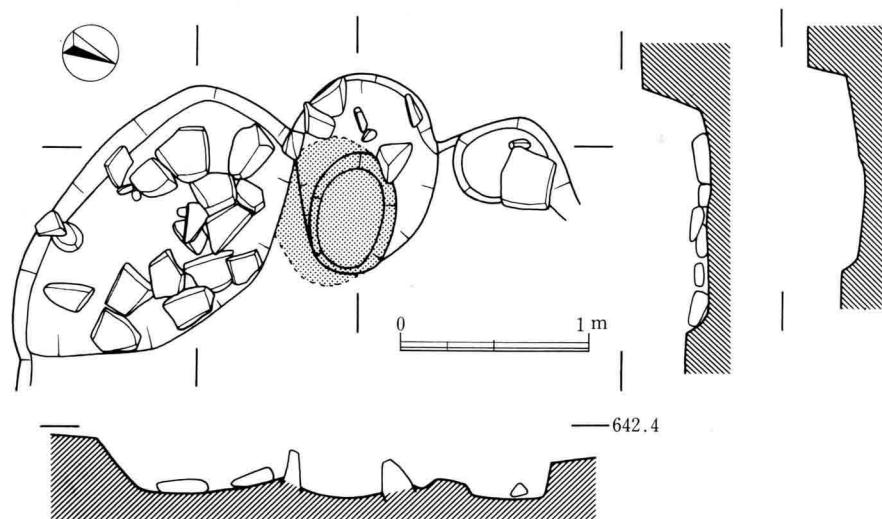
III-39 11号住居址

12号住居址

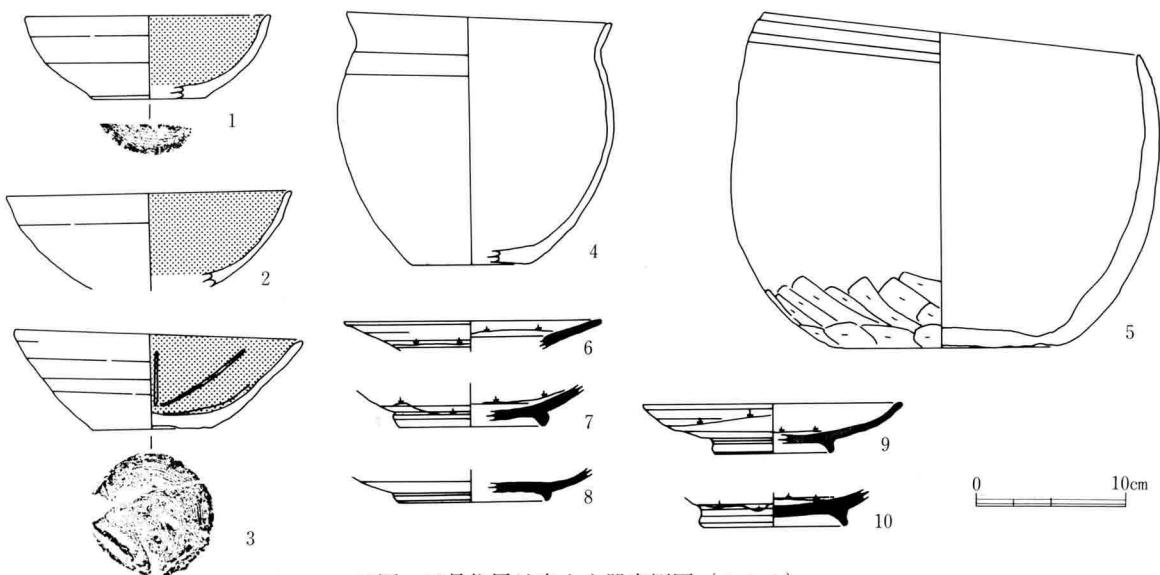
遺構（43・44図、III-40） 調査地中央の小丘陵斜面下の平坦地から単独遺構として検出した。形態は隅丸方形を呈する。規模は主軸外法4.3m・内法4.05m、南北軸外法4.6m・内法4.4mを測り、床面積約17.8m²である。掘り込みは東・南壁で25cm、西・北壁が15cmになる。床面は西壁添いで南へ傾斜し、東西軸間では中央が若干凹む傾向にある。カマド前面から住居址中央付近は堅緻な床面になる。カマドは南西隅に西壁を突出し構築されるが、調査時では既に破壊を受け構築石材の一部と支脚立石・火床が確認されたにすぎない。形態は石芯製両袖形である。火床の範囲は長軸70cm・幅60cmで、カマドの全長1.15mと推定する。カマド左右には貯蔵穴と推定される掘り込みがある。共に壁から突出する。右側のものは円形状を呈し長軸0.55m・床面からの深さ8cm程のもの



43図 12号住居址実測図 (1 : 80)



44図 12号住居址カマド実測図 (1 : 40)



45図 12号住居址出土土器実測図（1：4）



III-40 12号住居址

で、長軸30cmの平石が落ち込んでいる。左側のものは不整楕円形を呈し、長軸1.6m・幅0.95m・床面からの深さ8 cmの規模になる。底面は鍋底状になり、小さな平石の配石がある。柱穴様のピットが2個住居址内より検出されたが深さ10cm程のもので柱穴として用を供さないものと考える。このほか床面には丸石と平石が置かれており、4ヶ所の火床を確認した。

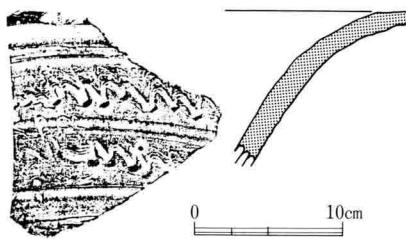
遺物（45図） 出土量が比較的多い割には完形品が少ない。器種には土師器壊（1～3）・甕（4）・鉢（5）、須恵器甕、灰釉陶器段皿（6）・皿（7～9）・椀（10）がある。1～4の底部外面には糸切り痕が認められ、ロクロによって仕上げられる。壊は内面黒色処理され、3はヘラミガキ後暗文が付される。鉢の調整はナデによるが、体部下方及び底部外面はヘラケズリによる。灰釉陶器の施釉は漬け掛である。

柱穴群 I

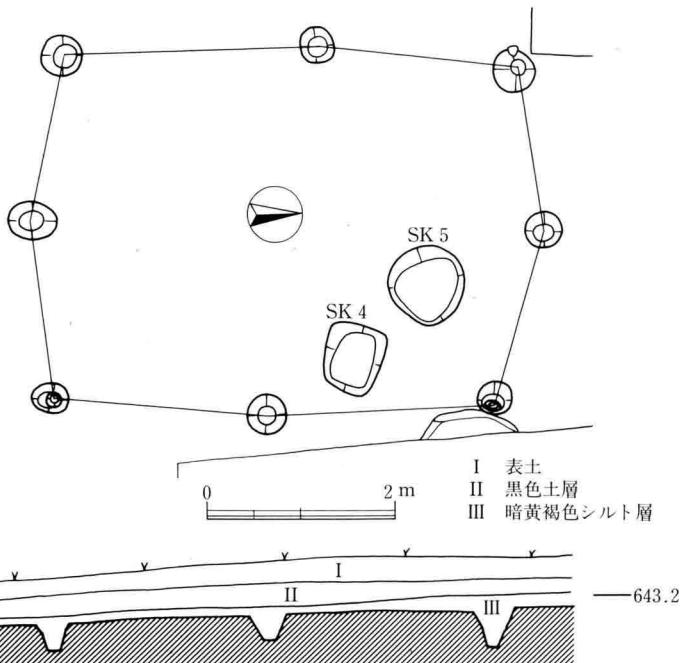
遺構（47図、III-41） 調査地の西北端に位置し、4号・5号土坑を内包し、2号住居址と近接する。現地表面は南に傾斜し、遺構検出面もそれに応じて傾斜するが現地表面程でない。遺構は2間×2間の掘立柱建物址と推定される。8個の柱穴をもって構成されるが、その配列は直線でなく、中央のものは外方へ張り出し8角形状を呈する。長軸はほぼ南北軸線状にあり、中央柱穴の芯々間直線で5.46mを測る。1間の長さは2.1m～2.7mの数値になり一定間隔ではない。東西軸は中央柱穴の芯々間直線で3.9mである。1間の長さは1.8m～1.9mを測りほぼ一定の規格になる。柱穴の直径は30～40

cm、深さ30～40cmで、2個には直径15cm程の柱痕穴がある。

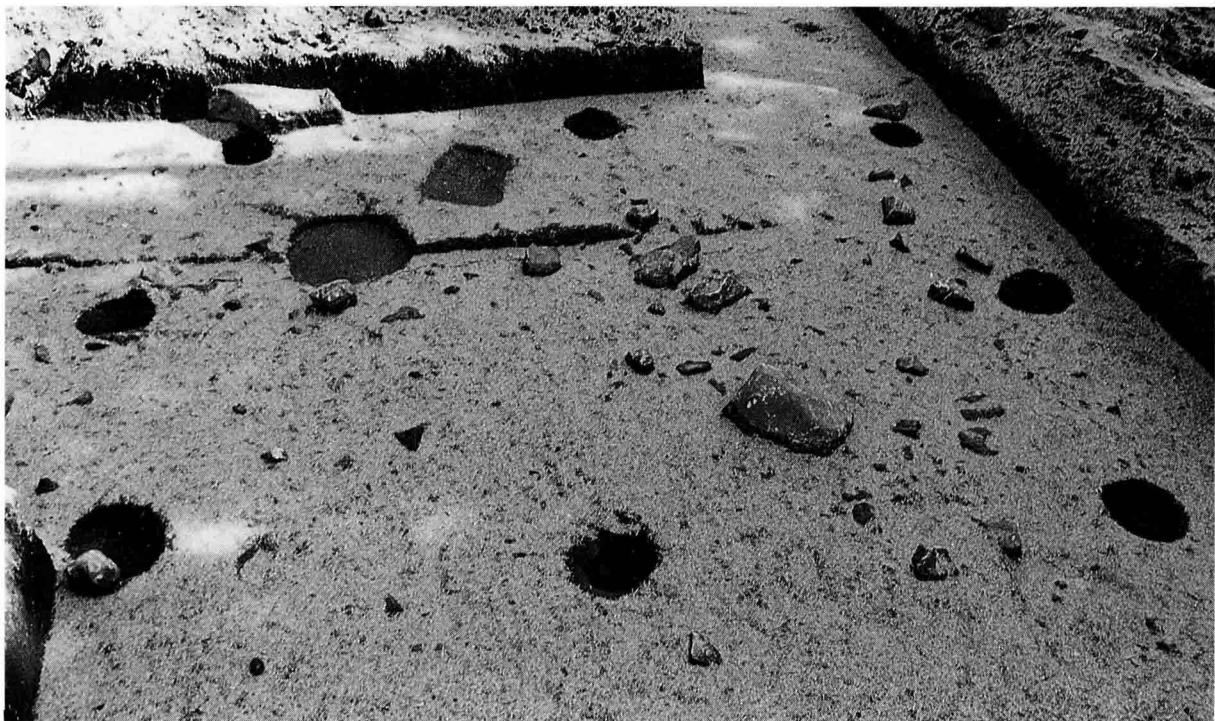
遺物（46図） 柱穴からの遺物の出土はなかったが、低面付近の堆積土より、土師器壺、須恵器甕片を得た。近接する2号住居址に付属する可能性もある。



46図 柱穴群1出土土器拓影図（1：4）



47図 1号建物址実測図（1：80）

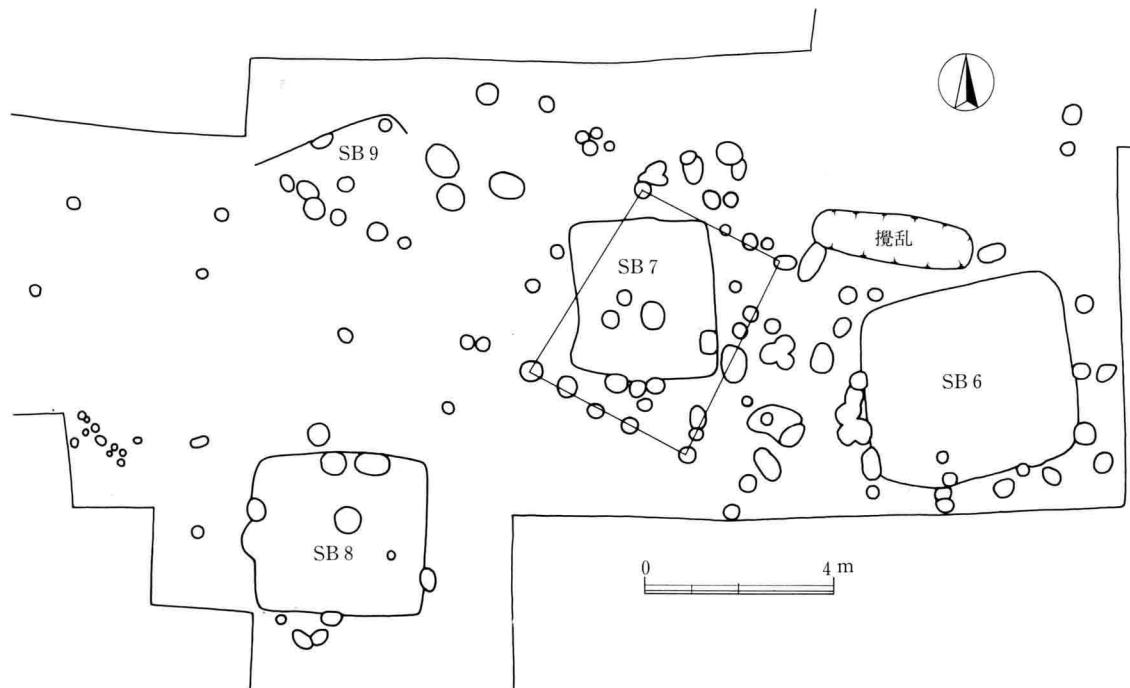


III-41 柱穴群1（カラマツ落葉）

柱穴群 2

遺構 (48図、III-42) 調査地中央東寄りの東向き緩斜面の遺構群と重複している。調査では覆土が住居址のもと同質の黒褐色砂質土であったため、住居址覆土内からの検出はできなかった。また前後関係も不明である。柱穴の規格も一様でなく大小ある。これらの中であえて長方形配列規格の柱穴列を抽出すると7号住居址と重複する1棟のみである。2間×2間の規模を推定するもので、長軸方向はN30°Eを指す。長軸全長4.5m・1間2.25m、東西軸3.5m・1間1.4~2.0mの規模と予想する。

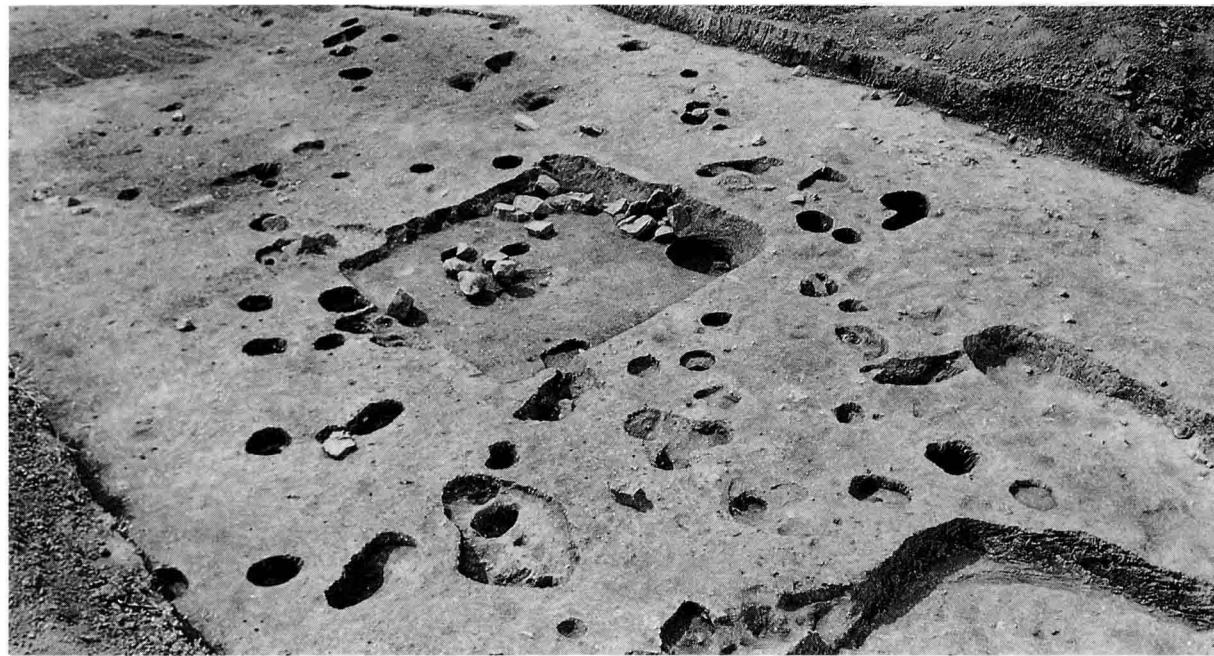
遺物 数個の柱穴から土器の小破片の出土をみたが、土師器壺がほとんどである。図上復元可能なものはない。



48図 柱穴群 2 実測図 (1 : 60)



III-42 柱穴群 2 (南西より)

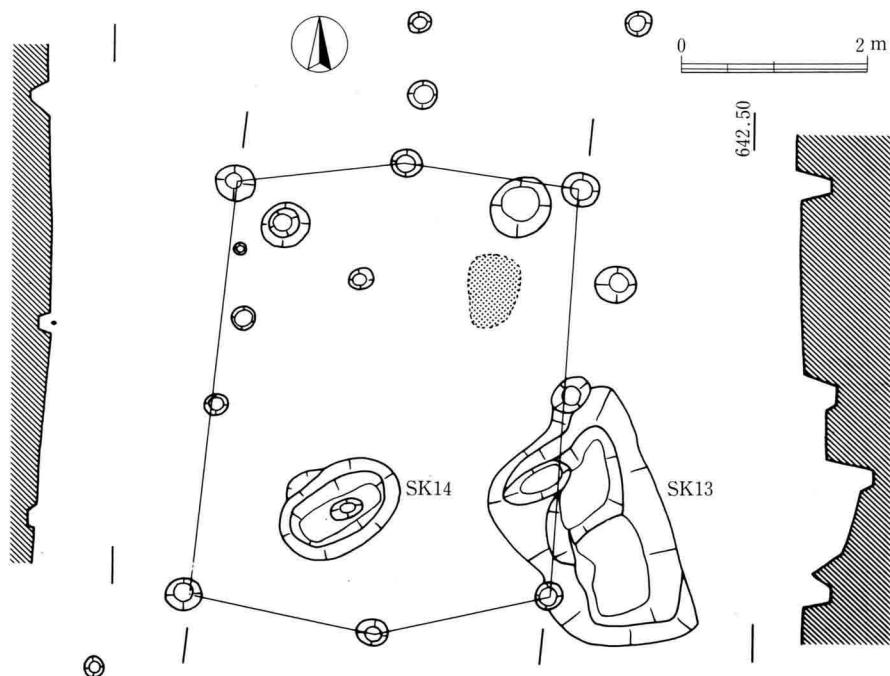


III-43 柱穴群（東より）

柱穴群 3

遺構 (49図、III-44) 調査地中央の小丘陵北西斜面下の平坦地へ移行する地形変換点に位置する。該期の13号・14号土坑と重複関係にあるが新旧関係は不明である。形態は2間×2間のもので柱穴群1と近似するが、長軸線は直線になり、6角形を呈する。短軸の中央の柱穴が外方に張り出す。長軸方向はN 8°Eである。長軸中央の全長は5.0m、外縁は全長4.4mを測る。東西軸は全長3.9m、1間1.8~1.9mになる。柱穴は直径30~40cmの規模で、深さは10~40cmである。北東隅に焼土が認められたが本遺構の関係は不明である。

遺物 柱穴からの遺物の出土はない。焼土周辺より土師器坏・甕片が出土している。



49図 柱穴群3実測図 (1:80)



III-44 柱穴群3、13号・14号土坑

4号土坑

遺構（50図） 調査地北西端に位置し、柱穴群1内にあり、5号土坑と近接する。形態は隅丸長方形を呈し、長軸0.74m・短軸0.6m・深さ10cmの規模である。主軸方向はN86°Wである。底面は平坦である。出土遺物はない。

5号土坑

遺構（50図、III-45） 4号土坑の北に近接する。形態は直径0.8m程になる不整円形を呈し、底面は若干丸味を帶る。出土遺物はない。



III-45 5号土坑

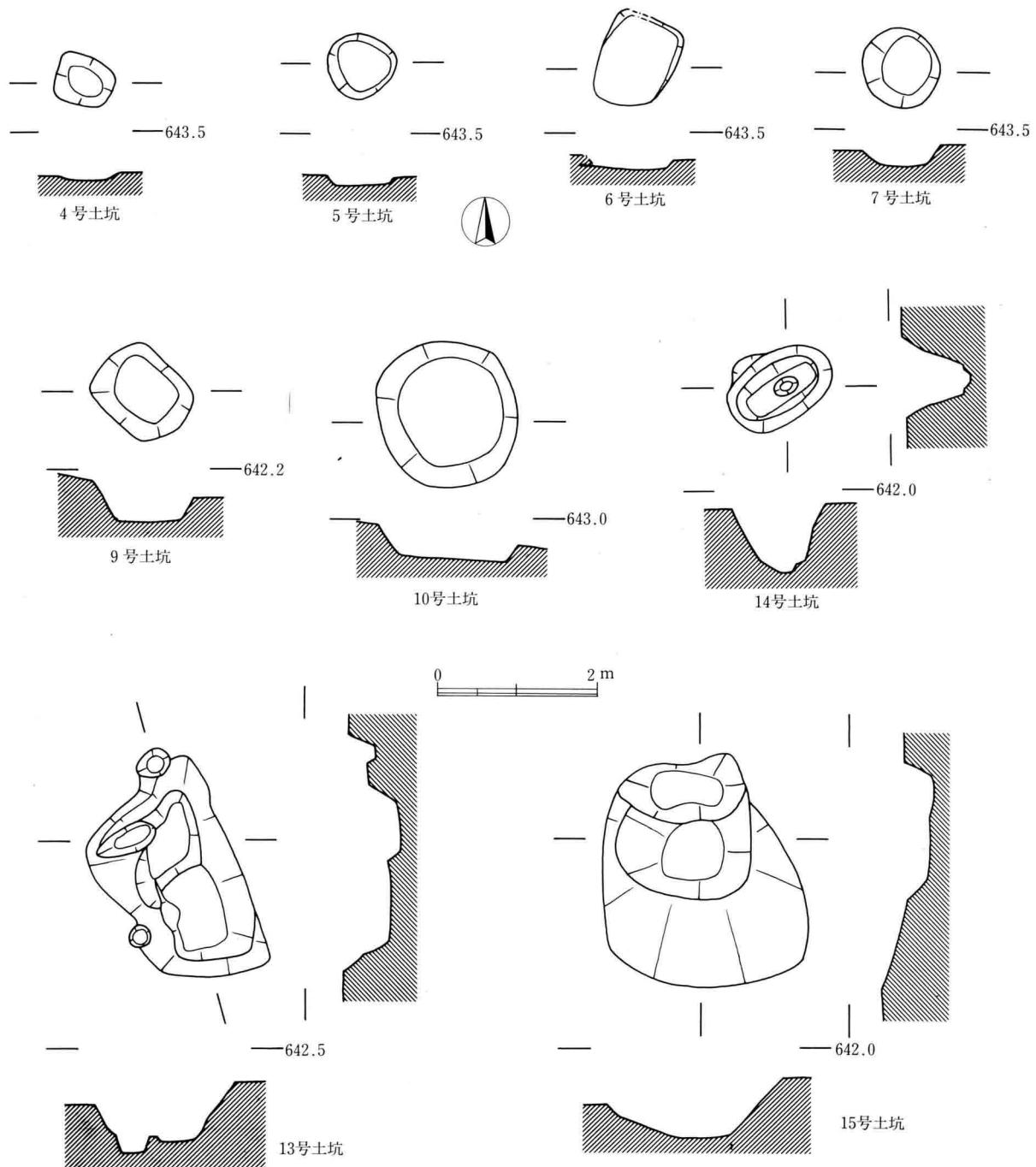
6号土坑

遺構（50図） 5号土坑の北に位置する。形態は隅丸長方形を呈するが、北・南壁の一部は試掘用トレンチにより破壊を受ける。長軸1.16m・東西軸0.95m・深さ12cmの規模である。長軸方向はN23°Eを指す。底面は鍋底状になる。遺物の出土はない。



III-46 7号土坑

遺構（50図、III-46） 柱穴群1周辺の土坑群の中で最北端に位置する遺構である。形態は直径0.92mの円形を呈する。深さは28cm



50図 平安時代土坑実測図 (1 : 80)

を測り、底面は鍋底状を呈する。

遺物 覆土より楕円押形文土器が1点出土したが、遺構外からも確認されていることから流込みと考えられる。

9号土坑

遺構 (50図、III-47) 調査地中央東寄りの小丘陵北東斜面に掘り込まれる。形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.2m・短軸0.96m・深さ50cmの規模である。主軸方向はN55°Wを指す。底面は平坦で軟弱である。

遺物 土師器環片1点のみ出土したが、図上復元可能な破片ではない。

10号土坑

遺構 (50図、III-48) 9号土坑の北に近接して検出された。形態は円形を呈し、直径1.8m・上方斜面からの

深さ32cmを測る。底面は平坦であるが東へ傾斜する。覆土は黒褐色砂質土であるが、角礫が多量に検出されていたことから、新しい時期の遺構の可能性が強い。遺物の出土はない。

13号土坑

遺構（50図、III-44・49） 調査地中央の南側、小丘陵北西斜面下に位置し、柱穴群2と重複関係にある。形態は不整台形状を呈し、掘り込みも複数遺構の様相がある。長軸外法2.8m・内法1.8m、中央部幅外法1.7m・内法0.7m程の規模になる。底面は鍋底状のものが2段になり、表土上面からの深さは最深で72cm・上段が60cmを測る。長軸方向はN29°Wである。遺物の出土はない。

14号土坑

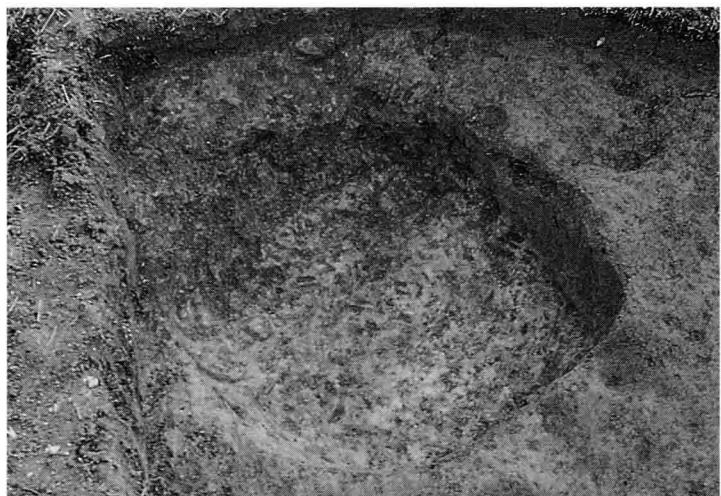
遺構（50図、III-44・49） 13号土坑の西に位置し、柱穴群3内にある。形態は長楕円形を呈する。長軸1.4m・幅0.85m・深さ70cmの規模になる。底面中央には逆木埋設痕様の長軸30cm・深さ10cm程のピットが1個ある。小振りではあるが縄文時代落し穴とも考えたが覆土から該期に比定する。主軸方向はN35°Eである。遺物の出土はない。

15号土坑

遺構（50図） 14号土坑の西に位置する。形態は不整隅丸台形状を呈する。長軸2.25m・最大幅2.5m・最少幅1.6mを測る。掘り込みは南壁が緩傾斜をもっているのに対し北壁は直に近い。底面は2段になり、最深は表土上面から38cm、上段が約30cmである。長軸方向はほぼ南北線上にある。遺物の出土はない。



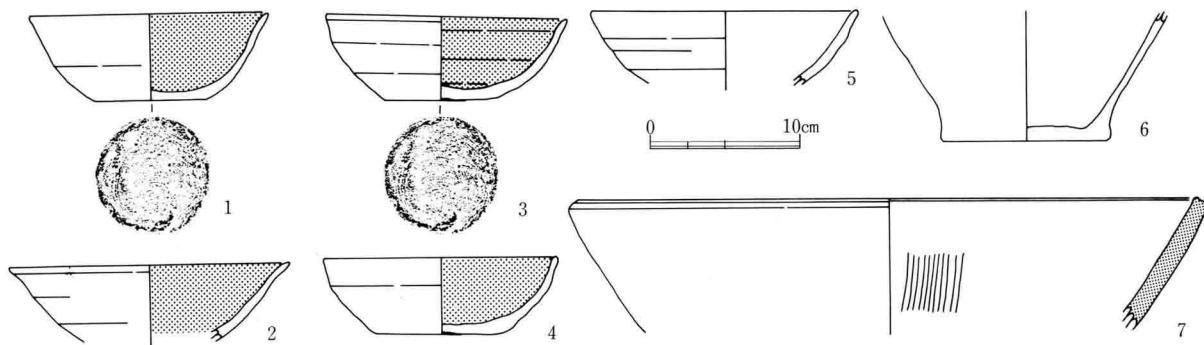
III-47 9号土坑



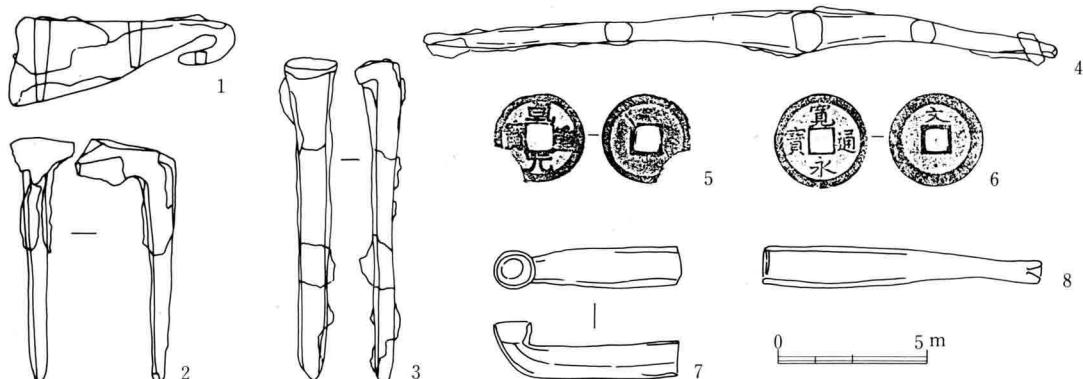
III-48 10号土坑



III-49 13号・14号土坑



51図 グリット出土土器実測図（1：4）



52図 金属製品実測図（1：2）

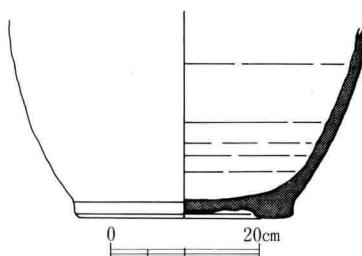
6 近世以降の遺構と遺物

猪平地籍の開墾あるいは居住の歴史は明らかでない。猪平溜池の築造が延宝7年（1679）のことであるから、近世初期には人手が入ったことは想像されるが、最近までこの地に居住していた宮崎義男氏から聞く所によると2代前からとのことであった。そうすれば本格的な開発は明治に入ってからのことと考えられる。今回の調査で明らかになった掘立柱建物址、暗渠状遺構はこの時期に求められよう。

建物址

遺構（54図、III-50・51） 調査地西側の東斜面を下りきった平坦地、地形的には凹地化した所に位置する。地表下20cm程で小角礫を多含する基盤層に達する。ここから柱穴列と土器埋置施設、円形土坑2基を検出した。柱穴列は基盤地形が高い部位の東・北から多く確認され、南・西からの検出は少ない。上層の耕作土内の掘り込みが考えられる。東柱穴列は54図の実線表示によると1.5mを基本とした4間が考えられ、点線標示では1間2.0mを基本としているようである。北及び西の柱穴配列間の距離も2m前後であることから後者の寸法による4間×3間の建物址を想定する。中央には10cm程の不整形な掘り込みがあり、西側に素焼の土器が底部付近が埋設されていた。更に西側の住居址内に円形を呈する直径1.55m・深さ85cmの土坑が掘られ桶を埋設する。調査では底部付近を確認した。住居外と思われる地点からも同規模の土坑を検出したが桶の埋置は確認されない。中央の浅い掘り込みから炭化物の出土をみたが、焼土等は確認されない。

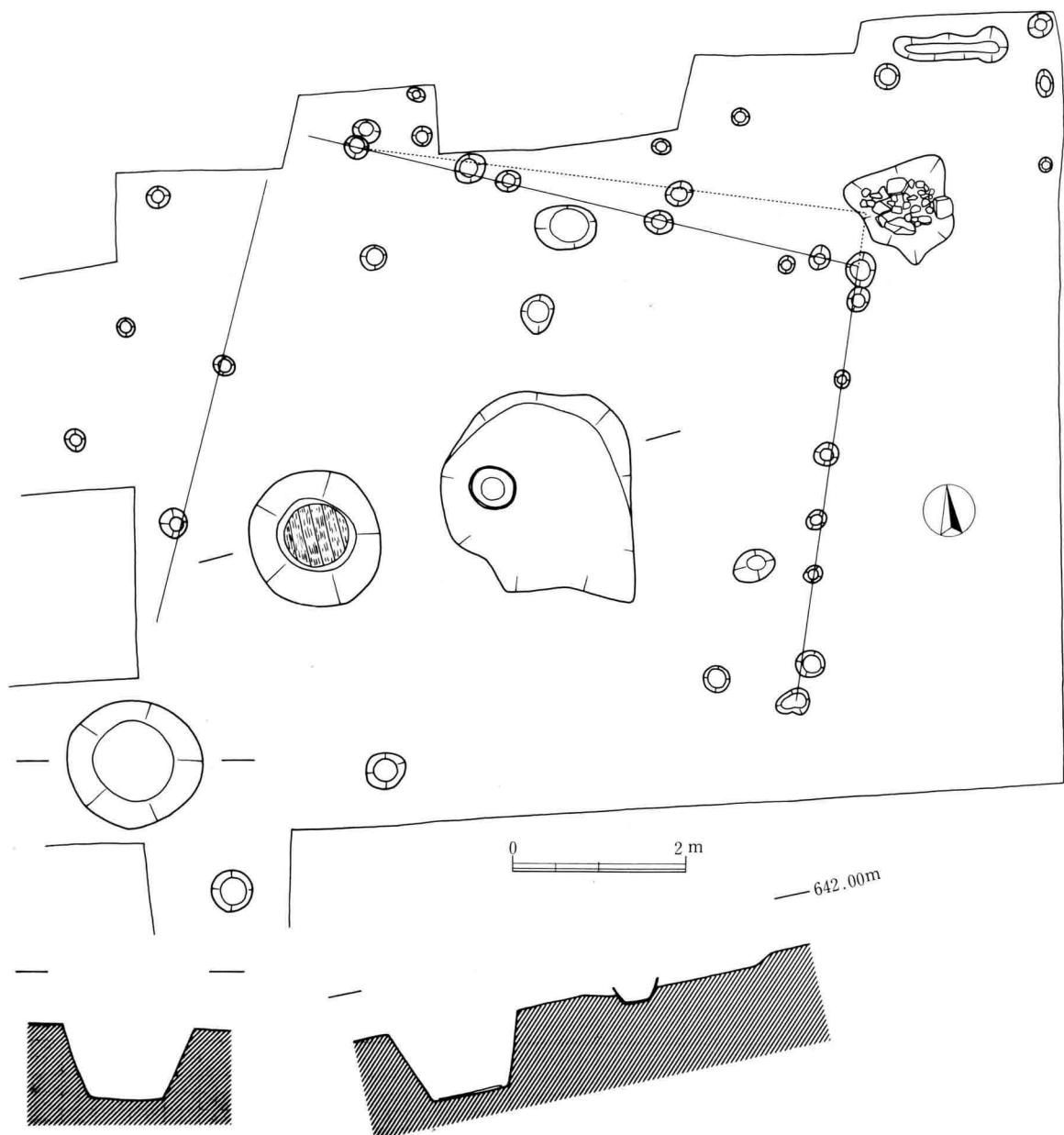
遺物（52・53図） 埋設された大甕とキセルの吸口がある。大甕は素焼のもので、黄茶褐色を呈する。体部上半以上は欠損するが、底径55cmを測る。水甕としての用途が考えられる。



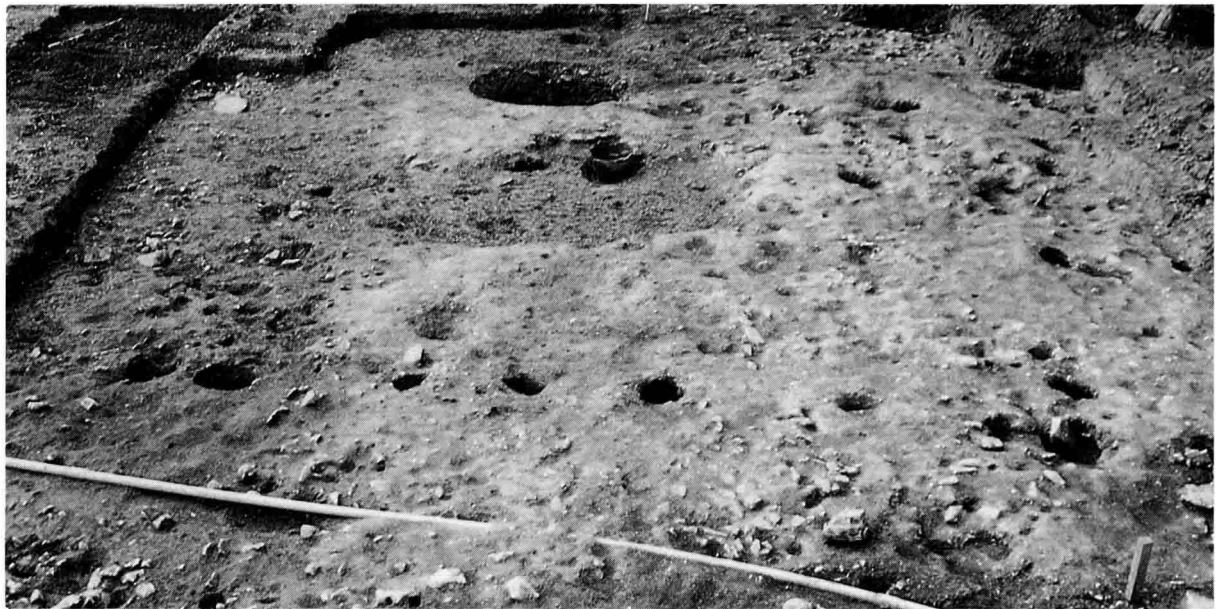
53図 建物址出土土器実測図 (1 : 8)



III-50 建物址付属施設



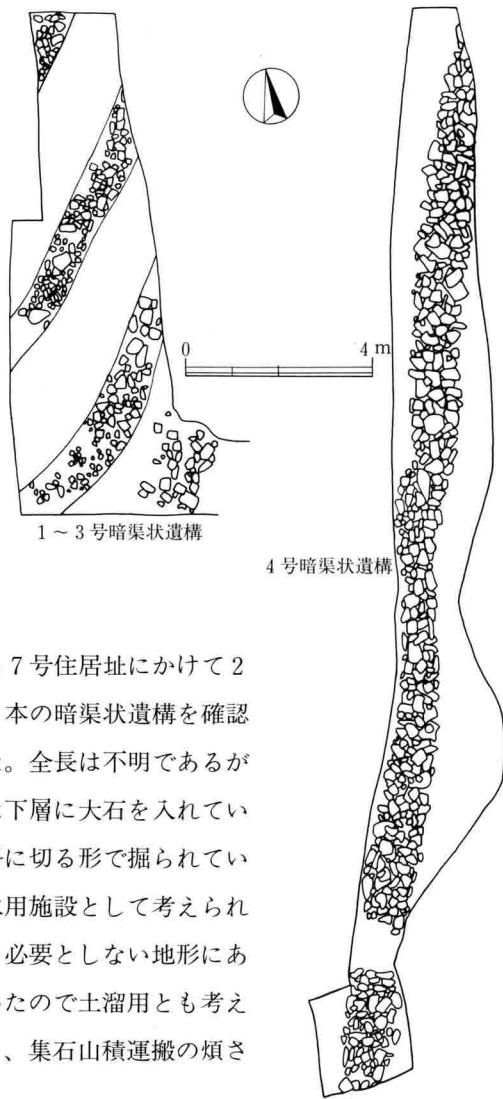
54図 建物址実測図 (1 : 80)



III-51 建物址（東より）



III-52 1～3号暗渠状遺構



4号暗渠状遺構

暗渠状遺構 (22・55図、III-18・24・25・52)

調査地西端の東傾斜面から5本、中央付近の8号住居址東から7号住居址にかけて2本、東寄りの3号住居址東側に1本、4号住居址上に2本の計9本の暗渠状遺構を確認した。このうち1～4号と4号住居址にかかるもののみ検出した。全長は不明であるが幅1m・深さ50cm前後の規模である。調査地東端付近のものには下層に大石を入れているのに対し、他のものは小角礫を埋める。方向は共に等高線を斜に切る形で掘られている。通常認められるこのような施設は暗渠排水と呼称され、排水用施設として考えられている。今回の調査で検出した遺構は全て斜面上にあり、排水を必要としない地形にある。4号住居址上の大石を用いたものは比較的急傾斜を有していたので土溜用とも考えたが、等高線との係わり、及び基盤層に角礫が多含することから、集石山積運搬の煩さから暗渠状の角礫廃棄溝になったものと考えられる。

55図 暗渠状遺構実測図
(1:160)

7 猪平遺跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	調整等			番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	調整等		
			口径	底径	器高		口径	底径	器高				口径	底径	器高		口径	底径	器高
1号住居址 (16図)																			
	土師器	椀	10.0	4.3	3.1	4/5	ロクロ・糸切り												
2号住居址 (18図)																			
1	土師器	坏	11.3			1/6	ロクロ・内黒												
2	"	耳皿		5.6		3/4	"・"・糸切り												
4号住居址 (24図)																			
1	土師器	坏	14.5	5.5	4.4	1/2	ロクロ・内黒・糸切り												
2	"	"	14.4	6.2	5.0	"	"・"・"												
3	"	"		6.0		1/3	"・"・"												
4	"	"		6.0		"	"・"・"												
5	"	"		5.8		"	"・"・"												
6	"	甕	9.4			1/8	"												
7	須恵器	高台付坏		6.0		1/6	"・"												
8	土師器	甕	24.7			1/8	"												
5号住居址 (27図)																			
1	土師器	椀	13.9	7.0	6.0	1/2	ロクロ・内黒・糸切り												
2	"	"		6.8		"	"												
3	"	坏	14.0	6.0	5.0	"	"・"												
4	"	"	16.2			1/4	"												
6号住居址 (30図)																			
1	土師器	椀		7.0		1/3	ロクロ・内黒・糸切り												
2	灰釉陶器	皿		7.4		1/8	"・漬け掛け												
3	"	椀		7.4		1/4	"												
4	須恵器	甕					"・突帯・波状文												
7号住居址 (34図)																			
1	土師器	坏	12.8	7.0		1/5	ロクロ・内面ミガキ												
2	"	甕	11.2	7.0	10.5	1/2	"・糸切り												
3	"	"	13.8			1/2	"												
4	"	"		8.4		1/4	"・糸切り												
5	"	"		6.2			"・底部内外面糸切り痕												
6	灰釉陶器	椀	15.6				"・漬け掛け												
7	"	"		7.2		1/5	"・"												
9号住居址 (37図)																			
1	土師器	坏					7.0							1/6	ロクロ・糸切り				
2	灰釉陶器	皿					13.0							1/10	"・漬け掛け				
3	"	椀					6.4							1/8	"・"				
4	土師器	甕					8.6							1/10	ナデ				
10号住居址 (39図)																			
1	土師器	坏					14.0							1/4	ロクロ				
2	"	椀					13.6	6.6	6.5	"	"			"・糸切り					

番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	調整等			番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	調整等												
			口径	底径	器高		口径	底径	器高				口径	底径	器高		口径	底径	器高										
3	土師器	羽釜	20.5			1/7	ナデ			7	灰釉陶器	皿		7.8		1/6	ロクロ・漬け掛け												
11号住居址 (42図)																													
1	土師器	椀		7.0		1/3	ロクロ・内黒・糸切り・暗文			8	"	"		8.0		"	"・"												
2	"	壺	11.0	4.6	3.1	3/4	"・内面ミガキ・"			9	"	"	13.8	6.4	2.7	1/3	"・"												
3	"	"	11.2	5.2	3.1	1/4	"・"・"			10	"	椀		7.7		"	"・"												
4	"	"	10.4	4.8	3.2	1/5	"・"・"・"			グリット (51図)																			
5	"	椀		7.4		1/3	"			1	土師器	壺	12.7	6.0	4.6	1/3	ロクロ・内黒・暗文・糸切り												
6	須恵器	蓋	14.2			1/7	"			2	"	壺	14.8			1/4	"・"												
7	土師器	甕	10.4 (5.4)	(8.7)	1/3	ナデ				3	"	壺	12.8	6.0	4.5	1/2	"・"・暗文・糸切り												
8	"	"		7.0		1/10	"・糸切り			4	"	壺	12.3	6.8	4.1	1/3	"・"・糸切り												
9	"	"		9.2		"	"			5	"	壺	14.2			1/4	"・内面ミガキ												
10	"	"	17.5			1/7	"			6	縄文土器	甕		9.0		1/8													
11	"	盤		10.0		1/3	"			7	珠洲焼	擂鉢	33.2			1/8	外面タタキ・内面ナデ												
12	"	羽釜	20.7			1/5	"			番号 種別 名称 出土地																			
13	"	"	23.5			1/6	"・ヘラケズリ			金属製品 (52図)																			
14	"	"	25.0			1/5	"			1	鉄製品	火打金具	6号住居址																
12号住居址 (45図)																													
1	土師器	壺	13.1	6.0	4.5	1/4	ロクロ・内黒・糸切り			2	"	釘				"													
2	"	"	15.3			1/3	"・"・"			3	"	"	7号住居址																
3	"	"	15.4	6.4	5.0	1/2	"・"・"・暗文			4	"	紡錘車・軸	6号住居址																
4	"	甕	14.1	6.4	13.2	3/4	ナデ			5	銅錢	軋元通宝	8号住居址																
5	"	鉢	20.1	12.4	16.7	完	"・ヘラケズリ			6	"	寛永通宝	AX17グリット																
6	灰釉陶器	段皿	13.7			1/4	ロクロ・漬け掛け			7	鉄製品	キセル	AB44グリット																
										8	"	キセル	建物址																



III-53 8号住居址出土土器

宮ノ下遺跡

IV 調査（宮ノ下遺跡）

1 調査地と地形

宮ノ下遺跡は薬師山を戸口山の北に突出した尾根に抱かれた北斜面にある。前面には聖川の旧河川侵蝕による湾入地形になり、後背湿地様になる。薬師山と戸口山の中間に戸口山からの支脈が突出し、水源を二つに分ける。東は薬師山から、西は戸口山からの水を集め、沢として流下し、小規模な扇状地形を形成する。遺跡はこの二つの複合扇状地形の扇端部に位置する。平成元年9月の試掘調査では、遺物包含層及び基盤層に多量の礫が含まれており、また包含層中から湧水が認められる等から、鉄砲水様の洪水が度々この二つの沢からもたらされたこと



56図 開発予定地（実線）及び遺跡推定範囲（点線）図（1：2,000）



IV-1 C トレンチ基盤層礫群

が想定された。それ故に遺跡の主要範囲を下方の緩斜面に求めた。ただし、48・49試掘坑より遺物の出土をみたことは、近辺に何らかの遺構の存在が予想され、戸口山側の沢添いにその存在を求めた。土器の散布状況から標高306m付近から下方を遺跡の範囲とするが、宮ノ下集落がある薬師山支脈の南斜面に展開する可能性も高い。現状地目は果樹園・畑であるが、それ以前の谷筋は水田として利用される。上方が削り取られ、下方が埋められて平坦化し、棚田様の地形になる。

2 グリットの配置

調査地は、破壊が懸念される調節池堰堤及び最大貯水による水没地を対象として実施し、標高298mから294m、南北長40m、東西長110m程の範囲である。地形に耕作等による改変が著しいため、現地形に合せて任意にグリットを設定した。基本的には $2\text{ m} \times 2\text{ m}$ の規模であるが、調整池堰堤建設部は幅2mのトレーニングを設定し調査を実施した。調査地中央を縦貫する農道を境に、東側をA区、西側をB区とした。グリット等の呼称は、トレーニングがA～E、グリットをそれ以降のアルファベットをアラビア数字で標記し、アルファベットの順序は調査の進展に従がって付した。

3 遺構の分布

農道部付近が最も底地化し、西側は戸口山山麓傾斜面、東側は戸口山支脈山麓の微高地となる旧戸口山水系沢と目される大小の角礫を多含する沢筋には遺物の出土が認められるものの遺構は存在しない。住居址等の遺構は沢筋における鉄砲水等の危険から避け、全て前記した山麓、山麓傾斜面の高地上からの検出である。縄文時代の遺構は確認されないが、東側の微高地より土器・石器類が多く出土した。古墳時代から平安時代にかけての遺構・遺物は東西の山麓から検出されるが、西側の山麓傾斜面に集中する。その位置は調査で判明したことであるが、山腹傾斜から山麓緩傾斜への地形変換点にあたる。また谷筋地形からも分離した平坦地でもある。上方のQ・U・Vのグリットからの出土遺物が多いので、遺構の存在を追求したが見い出せなかった。遺構密集地の遺構の掘り込みが浅いこと、またこの地域の基盤上部層が厚かったことを考え合せると遺物包含層中に遺構の存在が予想される。土層序はI層（表土）、II層（黒褐色砂質土・遺物包含層）、III層（黄褐色粘質土・基盤層）を基本とする。



IV-2 調査地近影（南西山腹より）



58図 グッリト配置及び遺構分布図（1：500）

4 縄文時代の遺構と遺物

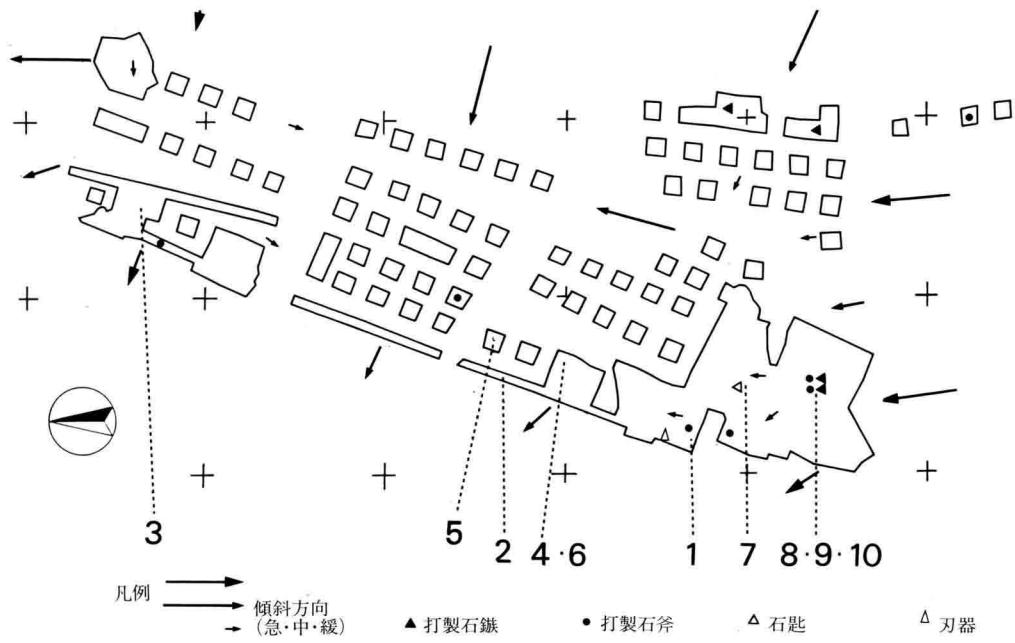
(1) 遺物出土地点

調査地東側の微高地では主として後期に比定される無文土器を少量得たのに対し、多くは西側戸口山東山麓からのものである。それもA 1号住居址よりも下方斜面からの出土で、標高の高い上方からの出土はない。石鎌・石斧が上方から出土している点使用方法をうかがわせるかのようである。

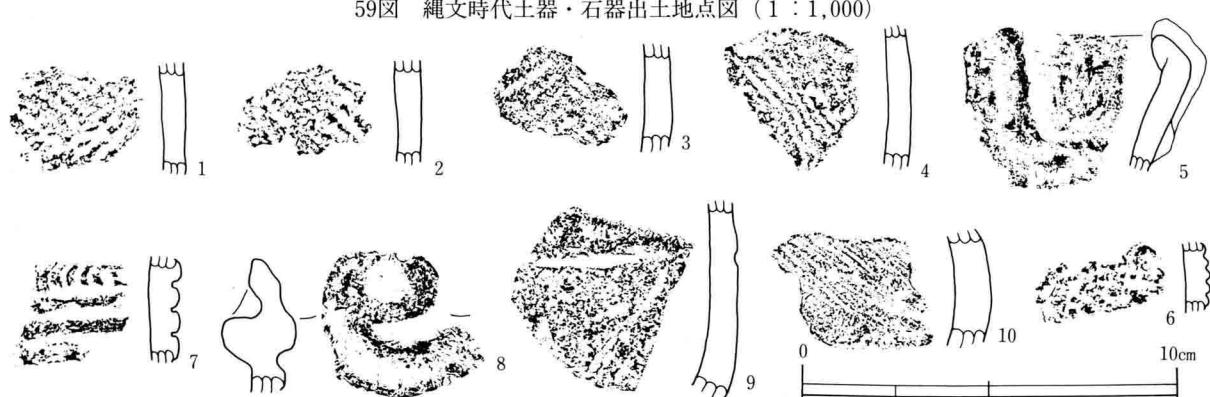
(2) 土 器 (59図)

縄文時代の遺物は土器・石器類あわせて整理用平箱1箱に満たない。時期は前期から晩期にわたる。出土量は少量で、摩滅したものや無文のため時期が特定できないものが大半を占めており、時期・型式がおおよそわかる資料を全て図示した。

1.~4は縄文を施す。1~3は羽状縄文で、1はLR、2・3はRLである。4はRLの斜縄文である。これらの胎土には纖維が見られないため、おそらく前期後半あたりの土器であろう。5は外反する口縁部下にクランク状



59図 縄文時代土器・石器出土地点図 (1 : 1,000)



59図 縄文時代土器拓影図 (1 : 2)

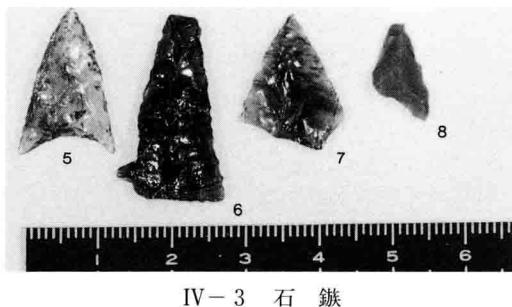
の細い隆帯を貼り付ける。6は結節浮線文が密集する。この2点は前期末ころと思われる。

7は半截竹管内で平行する半隆起線を描き、爪形文を伴う。8は外面に太い沈線文を施すよう、内面に盲孔をもつ円形小突起を配す。いずれも中期前半に属す。

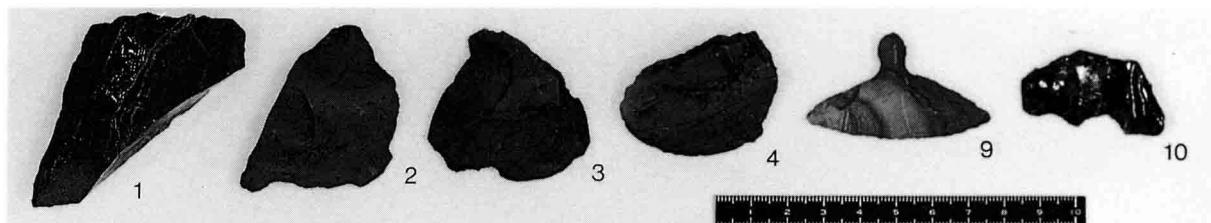
9は堀之内1式の鉢の脛部で、渦巻文間の三角形区画が見える。10は猪平遺跡と同じ晩期末葉の甕の肩部と思われ、斜位の条痕文が施される。

(3) 石 器 (IV-3~5)

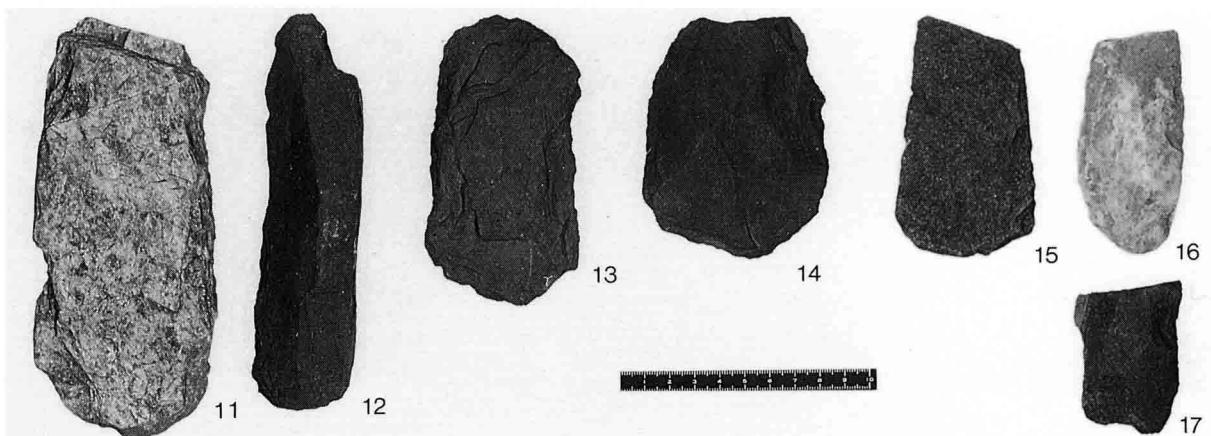
出土した石器のうち、原石・石核・剥片・碎片などの石屑を除いた器種の内訳は、石鏃4、石匙1、刃器1、打製石斧9である。1は黒曜石の原石である。長径7.5cmを測り、全面が自然面に覆われ、剥離面は新しいものらしい。2~4は剥片で、2がホルンフェルス、3・4がチャートである。5~8は石鏃で、6が黒曜石のほかチャートである。5のみ全体形がわかり、抉りの浅い凹基鏃である。7は小形である。8は長身の有茎石鏃である。9はホルンフェルスの横形石匙である。両面加工で均整のとれた形態である。10は黒曜石の縦長剥片の1側縁に2カ所のえぐりをもつ刀器である。11~17は打製石斧である。石質は11が緑色片岩、15が砂岩、16が緑色凝灰岩、その他が頁岩で、搬入石材が注目される。15~17は転石の自然面を1面に大きく残す。その他は素材の形はわからない。11は板状の大形品で、刃先は摩耗している。12は素材の形状をとどめて細長く、両端のみ剥離している。13は分厚く、消耗し切ったためか寸づまりで、分銅形のように両端を刃部としているらしい。14は刃部破片で、中央がくびれる形態のようである。両面とも摩耗し、線状痕が見られる。15・16は薄身で小形である。17はやや厚い基部破片である。



IV-3 石 鏃



IV-4 剥片・石匙・刀器



IV-5 打製石斧

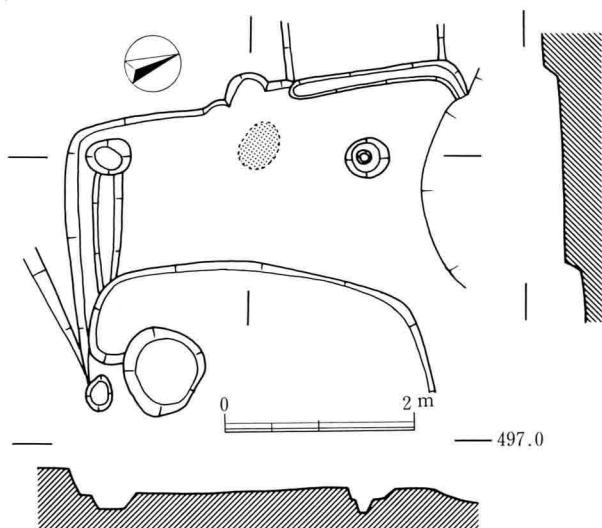
5 古墳時代の遺構と遺物

住居址4軒、土坑1基を検出した。B3号住居址を除き他の遺構と重複関係にある。

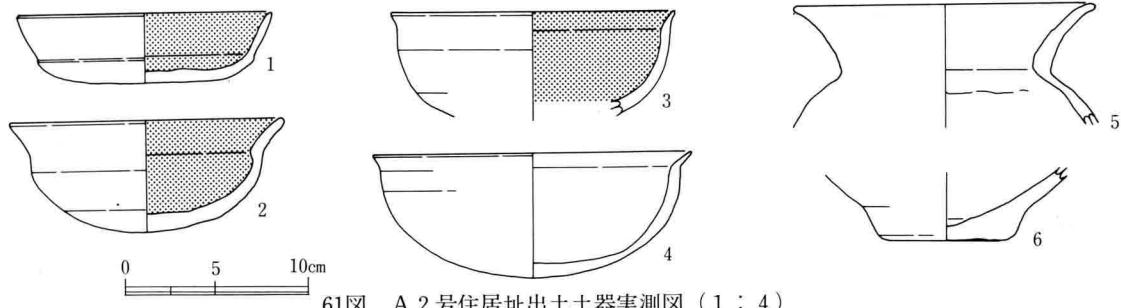
A2号住居址

遺構（60図、IV-6） A調査区西端の遺構群の一つで、戸口山々麓でも比較的平坦地に位置する。A3号住居址、A3号土坑と重複関係にある。形態は方形を呈するものと思われる。東壁がA3号住居址と重複、北壁が耕作により削平されているため規模等は不明であるが、北東隅部の周溝が屈曲することから南北軸内法4.2mと推定する。柱穴は2個検出されたが、壁との距離・位置関係が不規則である。焼土は西壁より壁中央に長軸52cm・短軸40cmの楕円形を呈して残存する。位置からカマドの火床と考えられ、両袖形のカマドが構築されていた可能性がある。この他に施設として南壁と西壁の北半分から北壁にかけて幅20~30cm・深さ5~10cm程の周溝がある。西壁の軸線はN12°Eを指す。

遺物（61図） 遺物の出土量は少ない。器種には土



60図 A2号住居址実測図 (1:80)



61図 A2号住居址出土土器実測図 (1:4)



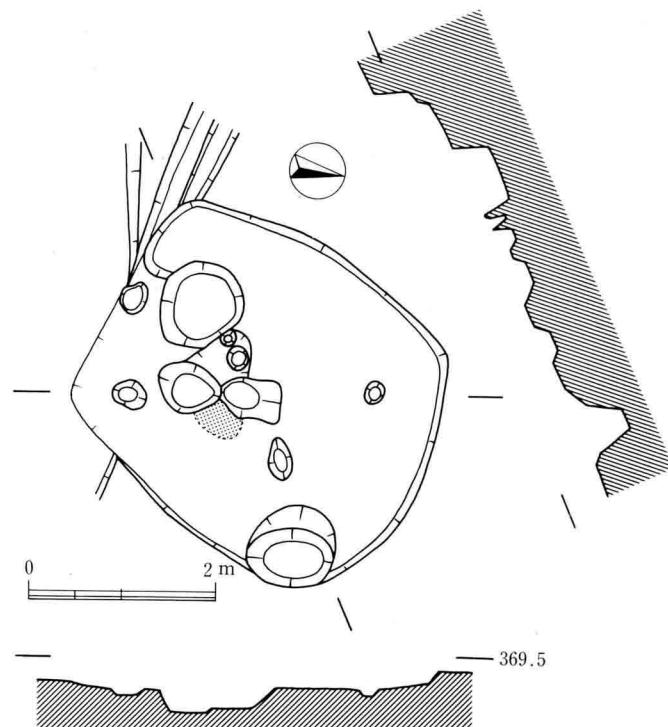
IV-6 A3号住居址、A2号土坑

師器坏（1～3）・甕（4・5）・高坏がある。坏は2形態に大別され、体部下方に鈍い稜を形成し、体部が直線的に外開し、底部が平底状を呈するものと、口縁部が外反し、体部に丸味を持ち、底部が丸底をなすものである。後者は更に口縁部形態に相違があり、内面に鈍い稜を有し大きく外反するものと器肉を減じながら短かく外開するものとである。甕は頸部がくの字状を呈し、口縁部が大きく外反し、球形胴の形態になる。

A 3号住居址

遺構（62図、IV-7） 調査地西端遺構群の一つで、同時期のA 2号住居址と平安時代のA 4号住居址と重複関係にある。A 2号住居址が両袖形態のカマドを有するとすれば、これよりも古い遺構である。形態は隅丸方形を呈し、長軸内方3.7m、短軸外方3.3m・内法3.15mの規模になる。長軸方向はN22°Eを指す。掘り込みは西壁がA 2号住居址の床面から15cmと最も深く、傾斜に応じて漸減し、東壁では数cmである。床面は平坦で軟弱である。炉は地床炉で、住居址の中央より東に偏って残存するが後出のピットにより破壊を受ける。柱穴は方形配列にならない。南壁側と北東隅に土坑状掘り込みが認められ、前者は円形を呈し直径90cm・深さ40cm、後者が楕円形で長軸92cm・短軸60cm・深さ46cmを測る。出土土器から住居址に伴う施設と考えられる。

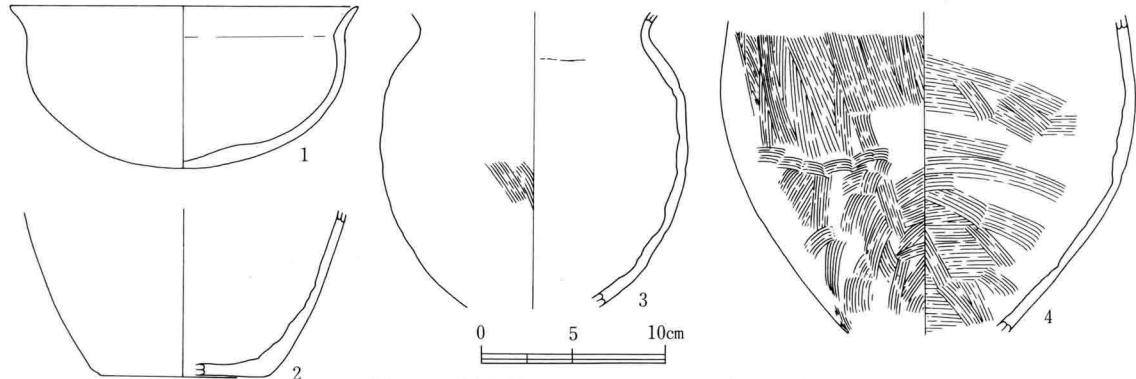
遺物（63図） 遺物の出土量は少ない。器種には土師器坏(1)・甕（2～4）・高坏がある。坏は口縁部が短かく外反し、丸底の器形で、ヘラミガキ調整で仕上げられる。3・4



62図 A 3号住居址実測図（1：80）



IV-7 A 3号住居址



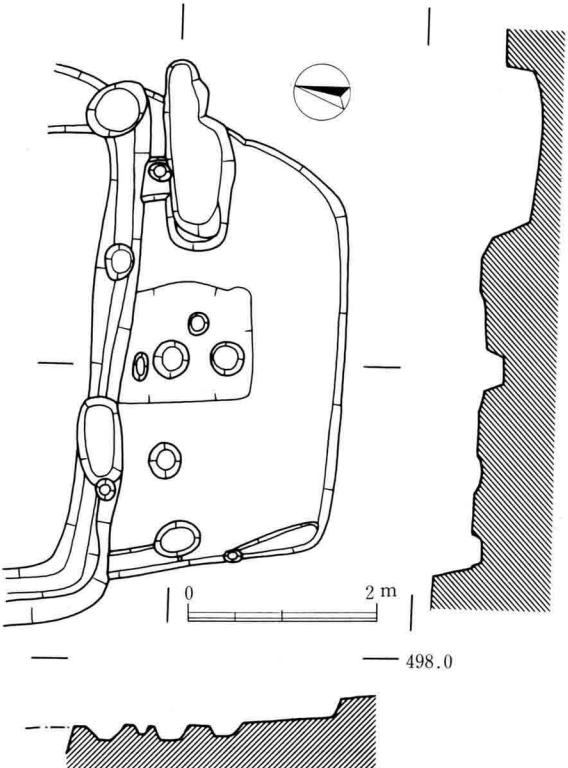
63図 A3号住居址出土土器実測図（1：4）

の甕は球形胴を呈する。調整はハケによるが、3はナデによる再調整が施され、4は内外面共に調整痕を残す。

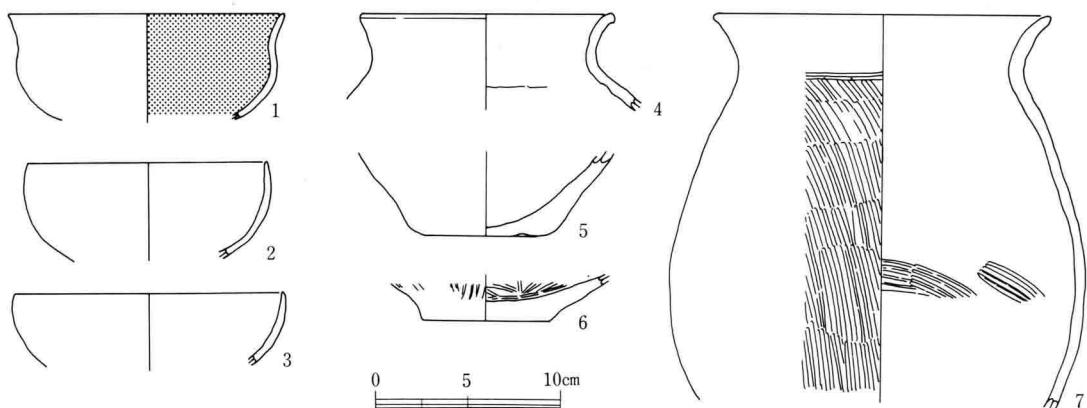
A5号住居址

遺構 (64図、IV-8) 調査地西端の遺構群の一つで、奈良時代のA1号住居址と重複し、北側半分程切り取られる。また該期のA1号土坑と東壁で重複関係にある。形態は東壁が張り出す不整方形を予想する。掘り込みは西壁が斜面上方に位置するため最も深く40cmを測り、東壁では数cm程になる。南北長は不明であるが、東西の長さ4.45mと推定する。床面は地形傾斜に応じて北東へ傾くが平坦である。主柱穴の配列は不明である。住居址の中央から5cm程長方形に凹み、炭化物が多く確認されたが、焼土は認められない。西壁に周溝がある。

遺物 (65図) 遺物の出土量は少なく、小破片が多い。器種には土師器壺（1～3）・甕（4～7）・高壺・甑がある。壺は丸底を呈し、内外面ともていねいなヘラミガキが施される。1は口縁部が緩く外反するのに対し、2・3は内弯して頸部を形成しない。甕は球形胴の壺形になるもの（4～6）と長胴化傾向にあるもの（7）に大別される。6に



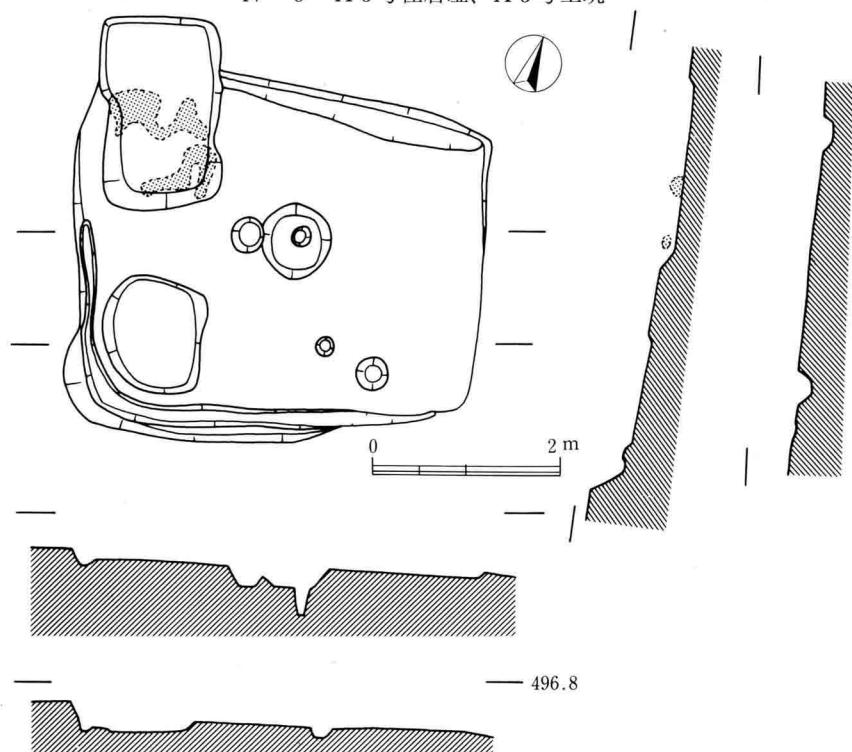
64図 A5号住居址実測図（1：80）



65図 A5号住居址出土土器実測図（1：4）



IV-8 A 5号住居址、A 5号土坑



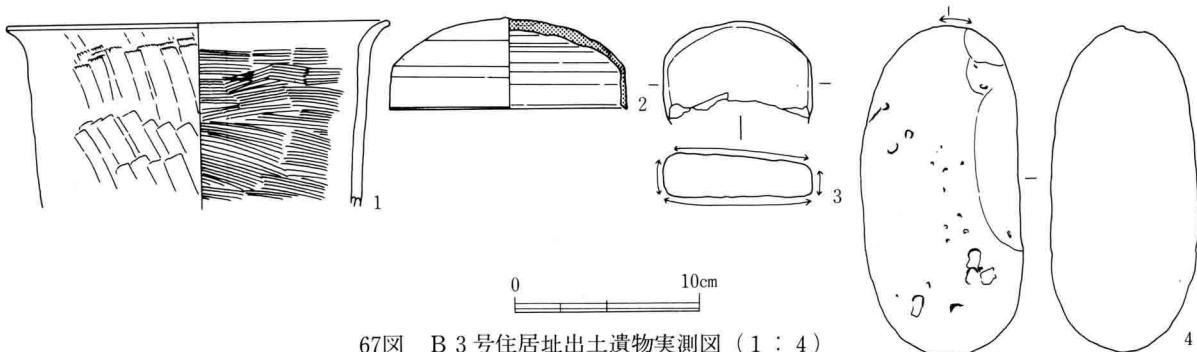
66図 B 3号住居址実測図 (1:80)

はヘラによる調整痕が残る。7の体部外面はタテヘラミガキで調整し、内面の器体接合部にハケメがある。

B 3号住居址

遺構 (66図、IV-9) 調査地の東端に位置し、戸口山支脈山麓直下にある。単独検出であるが、北西隅に土坑が伴う。形態は西壁が幾分長い台形状を呈する。西壁3.7m・東壁3.0m・東西軸内法4.1mの規模である。掘り込みは地形に添って北方向に傾斜し、南壁が最も深く35cmを測り、北壁では5cmにすぎない。柱穴は小屋組配列にならない。南西隅部に貯蔵穴と推定される長軸1.2m・深さ10cm程の不整円形の掘り込みがある。炉またはカマドの火床にあたる焼土は確認されない。南壁から西壁にかけて、北壁下に周溝がある。北西隅の長軸2.0m・東西軸1.15m・深さ8cmの隅丸長方形を呈する土坑は覆土が同質である点を除けば位置等から別遺構の可能性もある。底面・覆土に焼土塊が認められた。

遺物 (67図) 出土量は少なく、それも破片出土である。器種には土師器壺・甕(1)・高壺・甌、須恵器蓋(2)が



67図 B 3号住居址出土遺物実測図 (1 : 4)



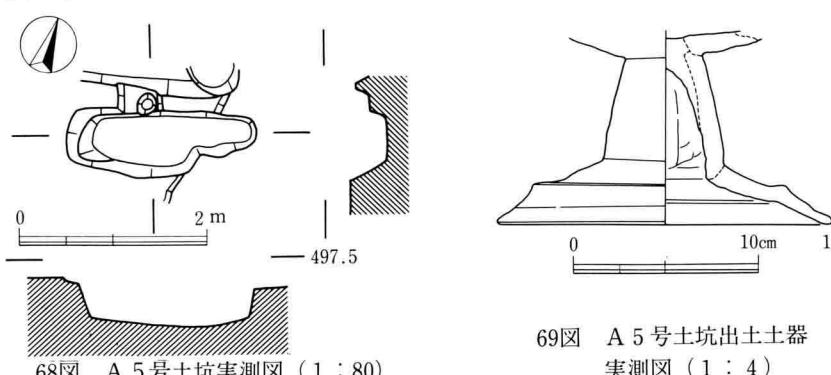
IV-9 B 3号住居址

ある。この他に砥石・敲打器が出土している。甕の体部は直線的で筒形を呈し、口縁部が短かく外反する。体部外面はタテヘラナデ、内面はハケナデ調整である。須恵器蓋は天井部と体部境に稜を形成しなく丸く仕上げる。天井部は回転ヘラケズリである。

A 5号土坑

遺構 (68図、IV-8) 調査地西端の遺構群内にあり、A 5号住居址の東壁と重複関係にある。形態は不整隅丸長方形を呈し、長軸2.0m・短軸最大幅1.2m・深さ48cmの規模になる。長軸方向はN69°Eを指す。底面は軟弱で鍋底状になる。

遺物 (69図) 土師器高坏と坏が出土しているが、図上復元できるものは高坏1点にすぎない。脚部はラッパ状を呈し、裾部に明瞭な段を形成する。脚筒部に巻き上げ成痕を残す。脚部外面及び坏部はていねいなヘラミガキで仕上げる。坏は半球形を呈し、高坏と同様の調整である。



68図 A 5号土坑実測図 (1 : 80)

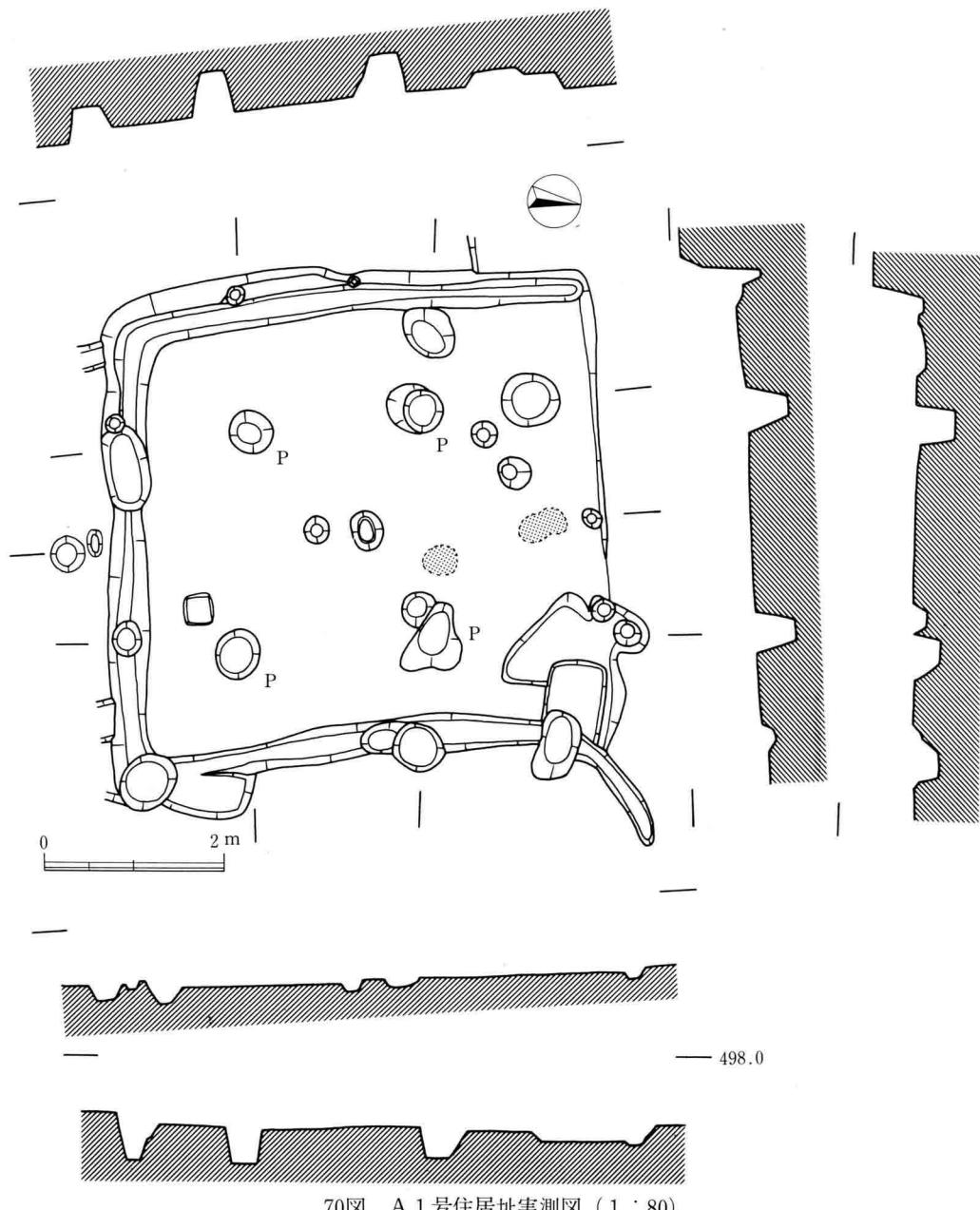
69図 A 5号土坑出土土器
実測図 (1 : 4)

6 奈良時代の遺構と遺物

戸口山山麓斜面に構築された遺構で、住居址1軒、溝址（住居址の可能性が高い）1本、土坑1基、ピット群1ヶ所がある。覆土は古墳時代・平安時代と同様の黒褐色砂質土である。

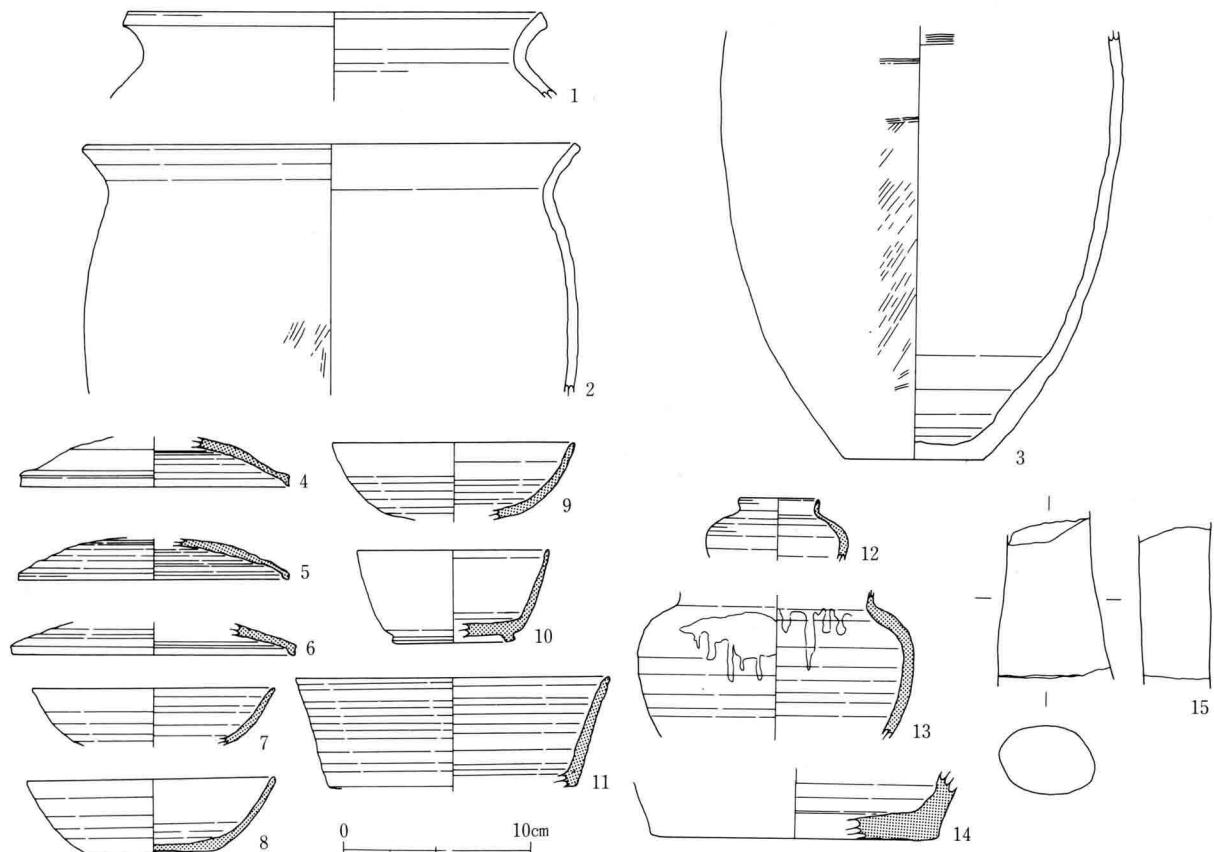
A 1号住居址

遺構（70図、IV-10～13） 調査地西端遺構群内にあり、古墳時代のA 5号住居址と平安時代のA 6号住居址と重複関係にある。形態は方形を呈し、南北軸外法5.55m・東西軸外法5.5mの規模になる。南北内法5.05m・東西内法4.6m程を測り、床面積は約23.2m²になる。南北軸方向はN13°Wを指す。掘り込みは地形傾斜の高い西壁で55cmを測り、東壁の立ち上がりは確認されない。A 5号住居址床面からの深さは15cmで、A 6号住居址からは6cmである。床面は若干地形に応じた傾斜があるものの平坦で堅緻である。床面に2ヶ所の火床を検出したが北壁

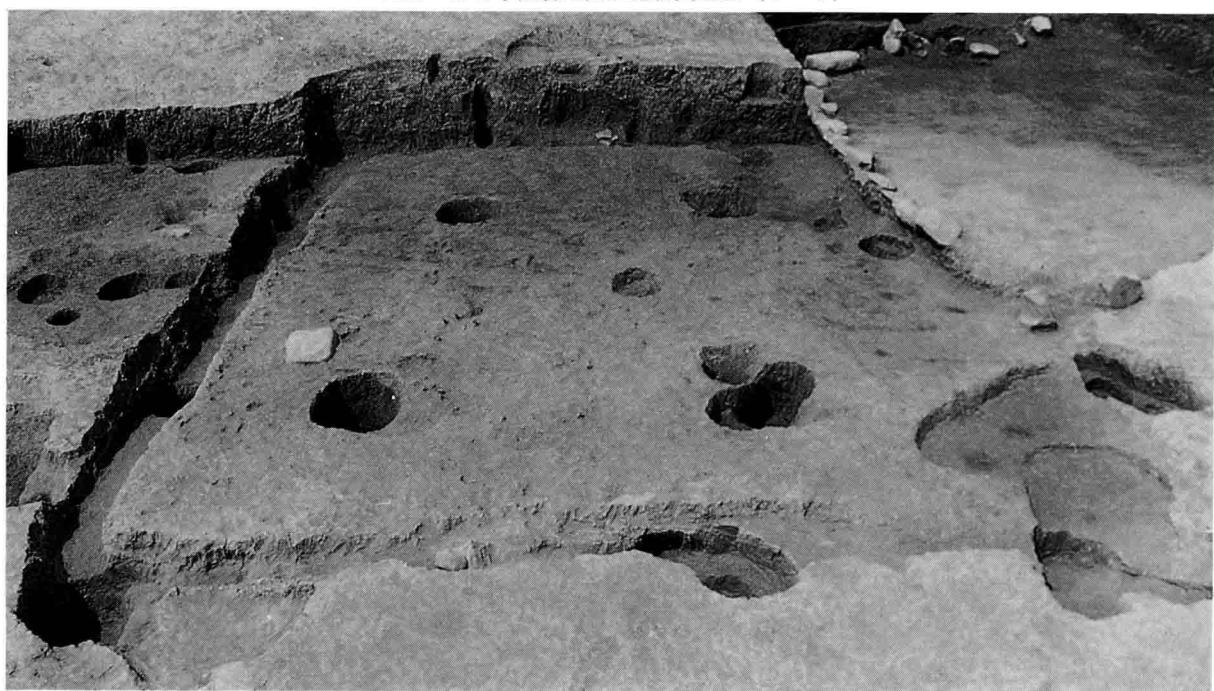


70図 A 1号住居址実測図 (1 : 80)

寄りのものがカマドの火床と推定する。周辺に炭化物の散布が多い。主柱穴は直径40cm・深さ30~45cmの円形ピット（P）をて、4本方形配列になる。西壁から南壁・東壁下に幅30cm・深さ10cm程の周溝が掘られ、北東隅部から屋外に延び終結する。住居址中央に長軸45cm・南北軸35cmを測る楕円形の小鍛冶炉がある。中心の焼土塊は還元化する。南壁際に一辺35cm程の隅丸方形を呈する平石が埋置していた。工作台であろう。



71図 A 1号住居址出土遺物実測図 (1 : 4)



IV-10 1号・5号・6号住居址 (東より)



IV-11 A 1号住居址小鍛冶炉



IV-12 A 1号住居址（東より）



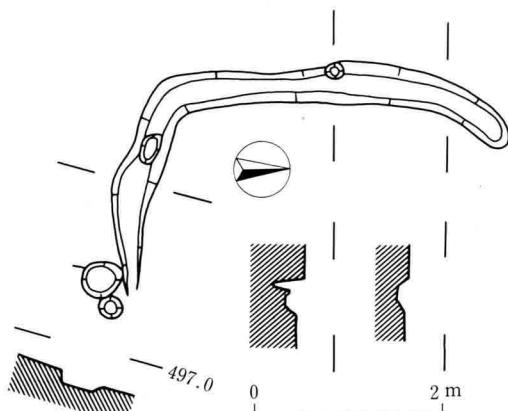
IV-13 A 1号住居址（南より）

遺物 (71・84図) 出土量は比較的多いが、破片出土である。須恵器の出土が目立つ。器種には土師器甕壺・甕 (1～3)、須恵器蓋 (4～6)・壺 (7～9)・高台付壺 (10・11)・短頸壺 (12・13)・甕 (14) がある。この他に磨石 (15)・刀子 (84図8)・釘(3)・羽口・鉄滓が出土している。土師器甕は長胴の体部で、口縁部が緩く展開する。ハケナデ調整痕を残すものもある。須恵器壺底部外面はヘラキリ技法によりロクロから切り放され、その痕跡を残す。高台付壺は回転ヘラケズリ後、低い台形の高台が付される。

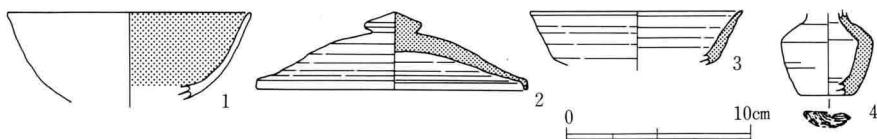
A 1号溝址

遺構 (72図、IV-14) 調査地西端の遺構群の一つで、単独検出遺構であるが、東・北側は自然傾斜と耕作により削平され不明である。形態は西から南にかけくの字形を呈し、屈曲角度は直角に近い。溝幅30～45cm・深さ12cmを測る。西溝の方向はほぼ南北軸線上にある。西溝の長さは3.9m、南溝は2.2mで自然終結する。地形斜面の上方に掘り込まれている点や、A 1号住居址同様の溝形態になることから住居址の周溝と考えた方が良さそうである。周溝内は地形傾斜に応じて傾斜し軟弱である。

遺物 (73・84図) 出土遺物は少量にすぎず、小破片出土である。溝址からの出土品は少なく、図示した遺物は周溝付近より出土したものである。器種には土師器壺(1)・甕、須恵器蓋(2)・壺(3)・高台付壺・小形壺がある。この他に鉄鎌 (84図1)・鉄滓が出土している。鉄滓はA 1号住居址からの流れ込みと考えられる。須恵器小形壺は平安時代に比定されよう。



72図 A 1号溝址実測図 (1:80)



73図 A 1号溝址出土土器実測図

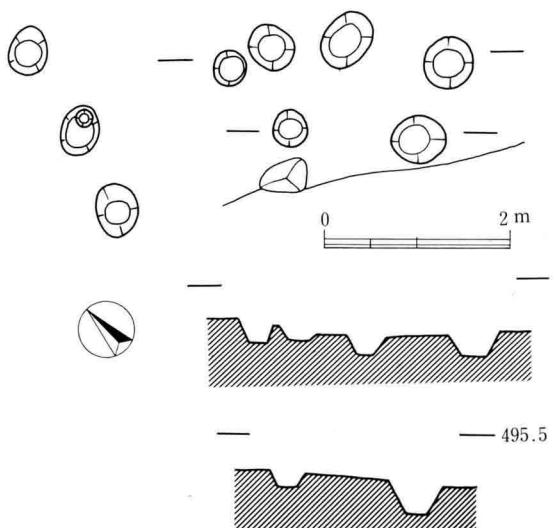


IV-14 A 1号溝址、A 2号住居址、A 2号土坑

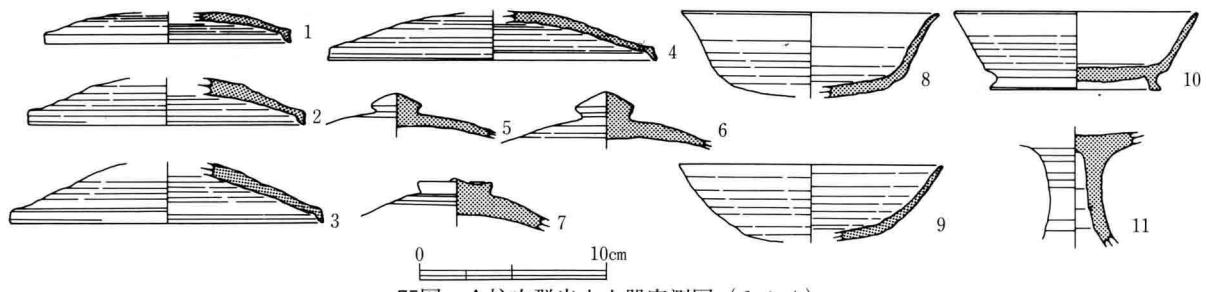
A柱穴群 I

遺構 (74図、IV-15) 戸口山山麓傾斜面上遺構としては最も低い位置にある。西にA 1号土坑が近接する。直径35~55cmのピットを10個確認したが、方形配列にならない。A 1号土坑に近接する3個は直線状に並び、間隔は1.0mを測る。群集する柱穴群は幅2m・深さ5~10cm程の溝状落ち込みを伴う。遺物の主たる出土地はこの落ち込みからのものである。

遺物 (75図) 遺物の出土量は少ない。須恵器の出土が多い。器種には土師器壺・甕、須恵器蓋(1~7)・壺(8·9)・高台付壺(10)・高壺(11)がある。壺の底部外面はヘラキリ痕を残し、台形の高台が付されるものは回転ヘラケズリ調整である。



74図 A柱穴群実測図 (1:80)



75図 A柱穴群出土土器実測図 (1:4)



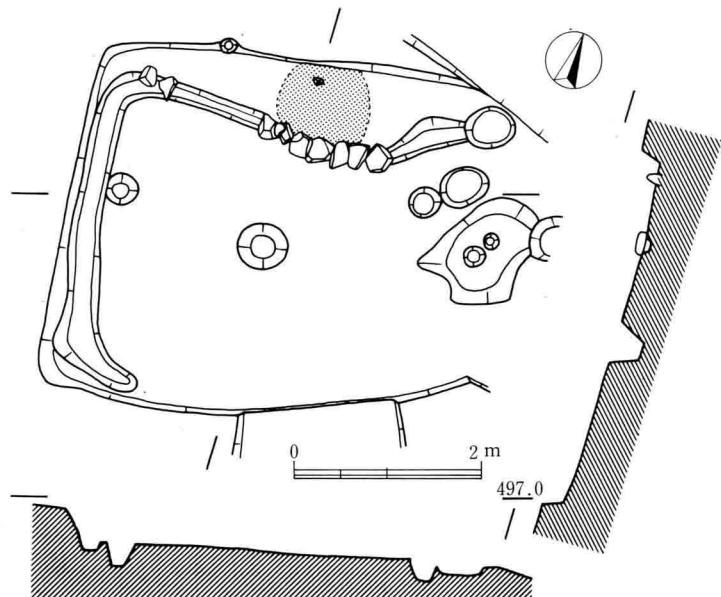
IV-15 A柱穴群1、A 1号土坑

7 平安時代の遺構と遺物

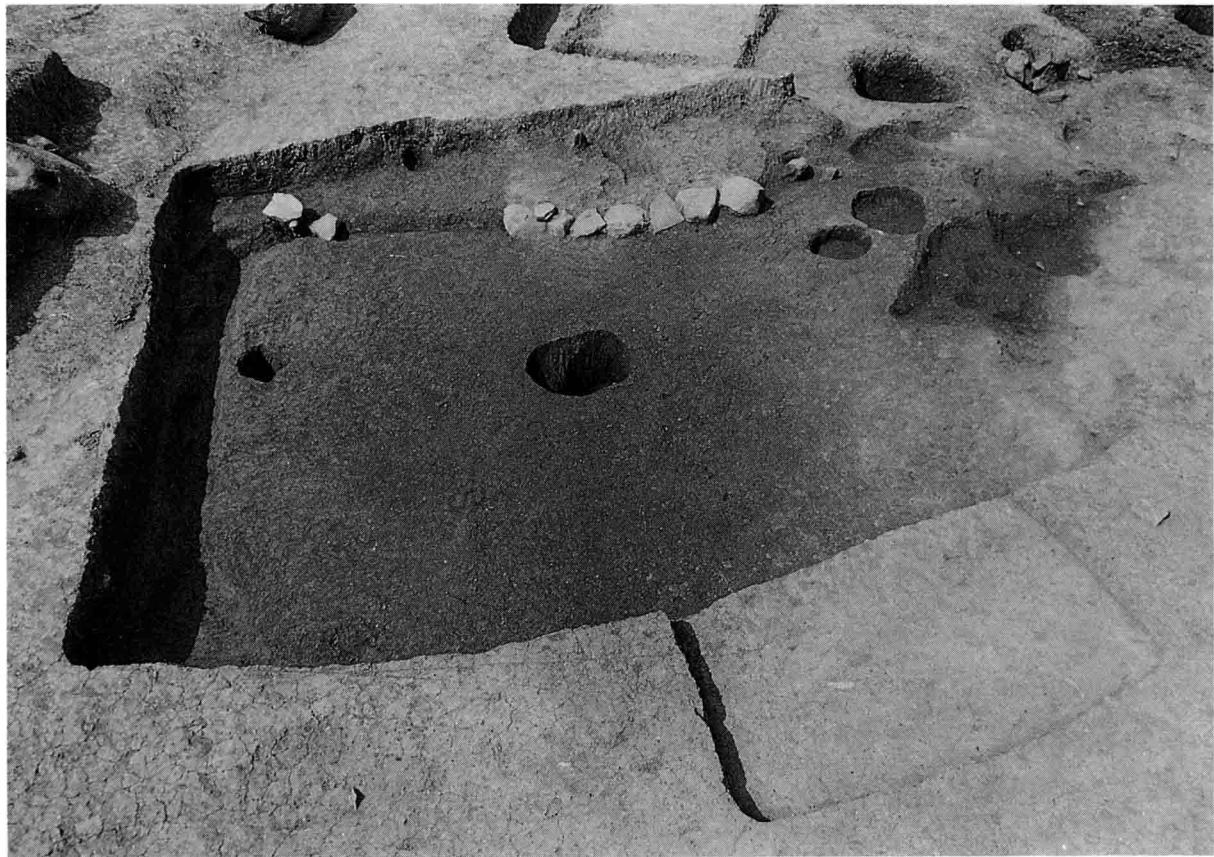
戸口山山麓傾斜地及び東側の微高地上に散在する。住居址4軒、土坑5基を検出した。

A 4号住居址

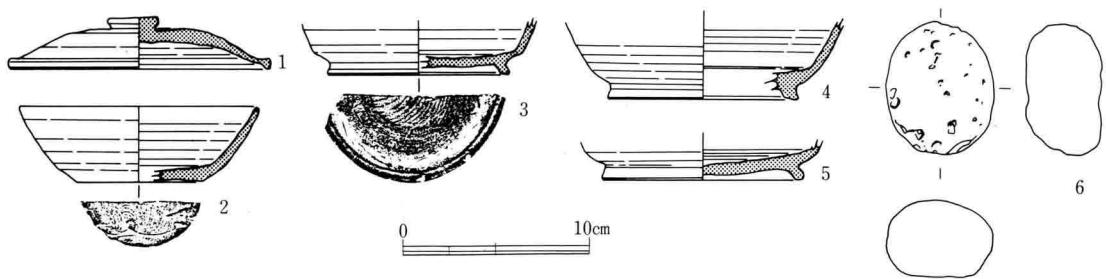
遺構（76図、IV-16・17） 調査地西端の遺構群内にあり、古墳時代のA 2号住居址と該期のA 3号土坑と重複関係にある。A 3号土坑の方が新しい。東壁は耕作の際削平されたものか確認されない。形態は南壁が内湾する不整長方形である。主軸はN $10^{\circ}W$ を指し、短軸にあたる。主軸外法最大幅3.86m・最小幅3.2mを測り、内法3.65m・3.05mになる。長軸（東西軸）外法を4.5m前後と推定する。掘り込みは地形傾斜上方の西壁が最も深く35cmになり、南・北壁中央で25cmを測る。床面は南北軸中央が若干凹み、東西軸は東へ傾く。堅緻な床面は認められない。カマドは北壁中央に構築



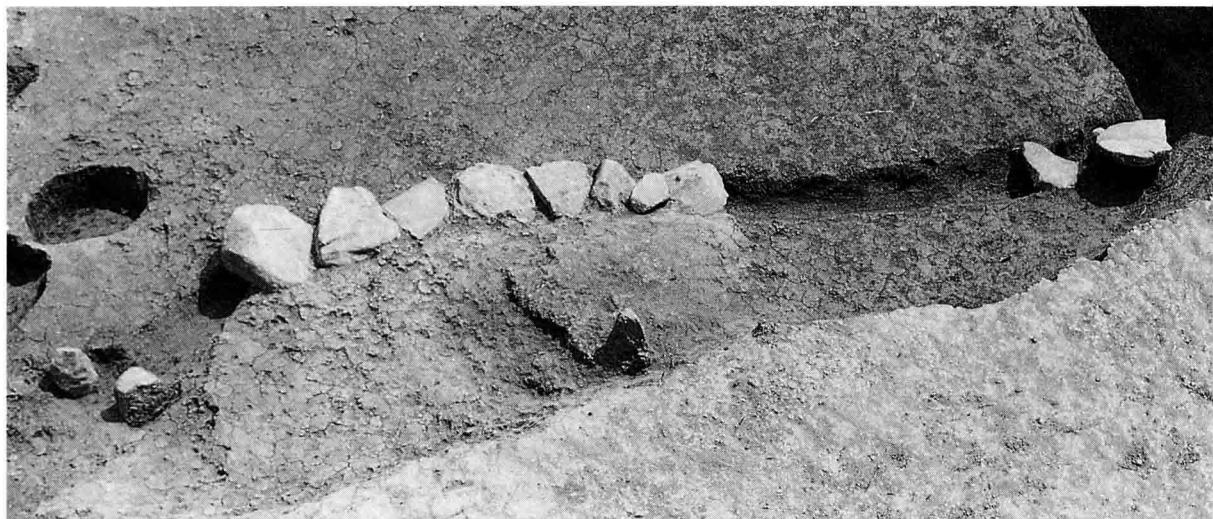
76図 A 4号住居址実測図（1：80）



IV-16 A 4号住居址、A 3号土坑



77図 A 4号住居址出土遺物実測図 (1 : 4)



IV-17 A 4号住居址カマド・周溝架設配石

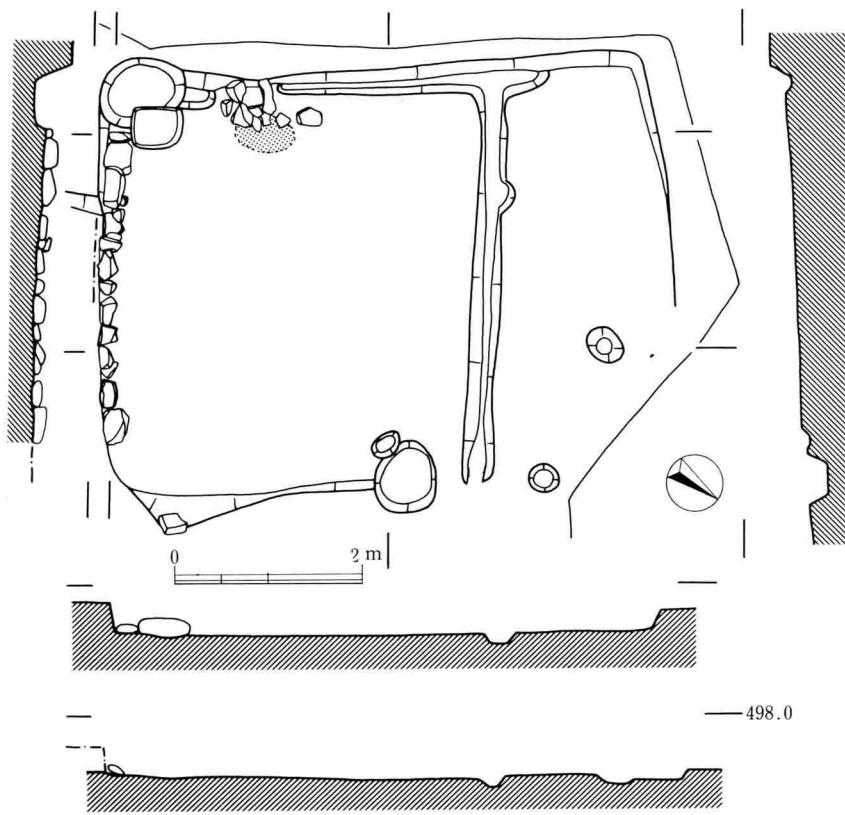
されるが、調査時には破壊され、直径1.0m程の焼土と支脚石が残存するのみであった。主柱穴は確認されない。南西隅部から西壁、そしてカマドを迂回する変形の周溝があり、東端は最大幅52cmの円形状のピットをもって終結する。周溝のカマド前面には8個平石を架設する。周溝の埋設及びカマド機能を考慮した施設と考えられる。また北西隅部にも平石2個が残存することから、北側周溝全面に架設されていた可能性がある。周溝の幅は西壁下で30cm前後、カマド前面では狭く18cm程で、深さは8~10cmである。

遺物 (77・84図) 遺物の出土量は少ない。器種には土師器壺・甕、須恵器蓋(1)・壺(2)・高台付壺 (3~5)がある。4は台付壺かもしれない。この他に用途不明の軽石(6)・小刀の刀身片 (84図6) が出土している。壺の底部外面には糸切り痕が、高台が付されるものの中央付近には糸切り痕が残り、外周は回転ヘラケズリで調整する。

A 6号住居址

遺構 (78図、IV-18~21) 調査地最西端に位置し、奈良時代のA 1号住居址と重複関係にある。北からの黄褐色粘質土の崩落土砂の堆積が著しかったため、この土砂を基盤層と思い込み、当初遺構が存在しないものと考えていた。そのためA 1号住居址を先行して調査を実施したが、南壁にあたる配石遺構を検出するに至り、新たな住居址の存在に気付き、崩落土を除去した所A 6号住居址の全容を露呈した。形態は方形を呈するが、後に北側へ住居を拡張しているため、最終形態は長方形になる。当初の規模は主軸外法4.45m・内法4.12m、南北軸内法3.8mを測り、床面積は約15.6m²である。主軸方向はN123°Wを指す。掘り込みは地形傾斜上方の西壁が20cm、東壁で8cm、南壁で32cmを測る。床面は主軸方向は地形に従い東傾斜するが、南北軸ではほぼ平坦である。住居址のカマド前面から中央付近には堅緻な床面が見られた。カマドは西壁の中央より左に寄った所に構築され、石芯製両袖形のものである。奥行78cm・内法幅25cm程の規模になり、底面に平石を敷く。南壁下には平石を一列に

並べる配石があり、カマド右から北壁にかけて周溝が掘られ、終末は地形傾斜の中で自然消滅する。南西隅に長軸95cm・深さ14cmの偏平円形を呈する貯蔵穴が掘られ、東縁に長軸54cm・東西軸42cm・厚さ18cmの隅丸長方形を呈する工作台石が据え置かれる。主柱穴は確認されない。北側の拡張は最大幅1.82mで、北壁は内弯する。東側は地形傾斜と耕作の際の削平により確認されない。北壁の高さは18cmである。床面は平坦で軟弱である。完形に



78図 A 6号住居址実測図 (1 : 80)



IV-18 A 6号住居址



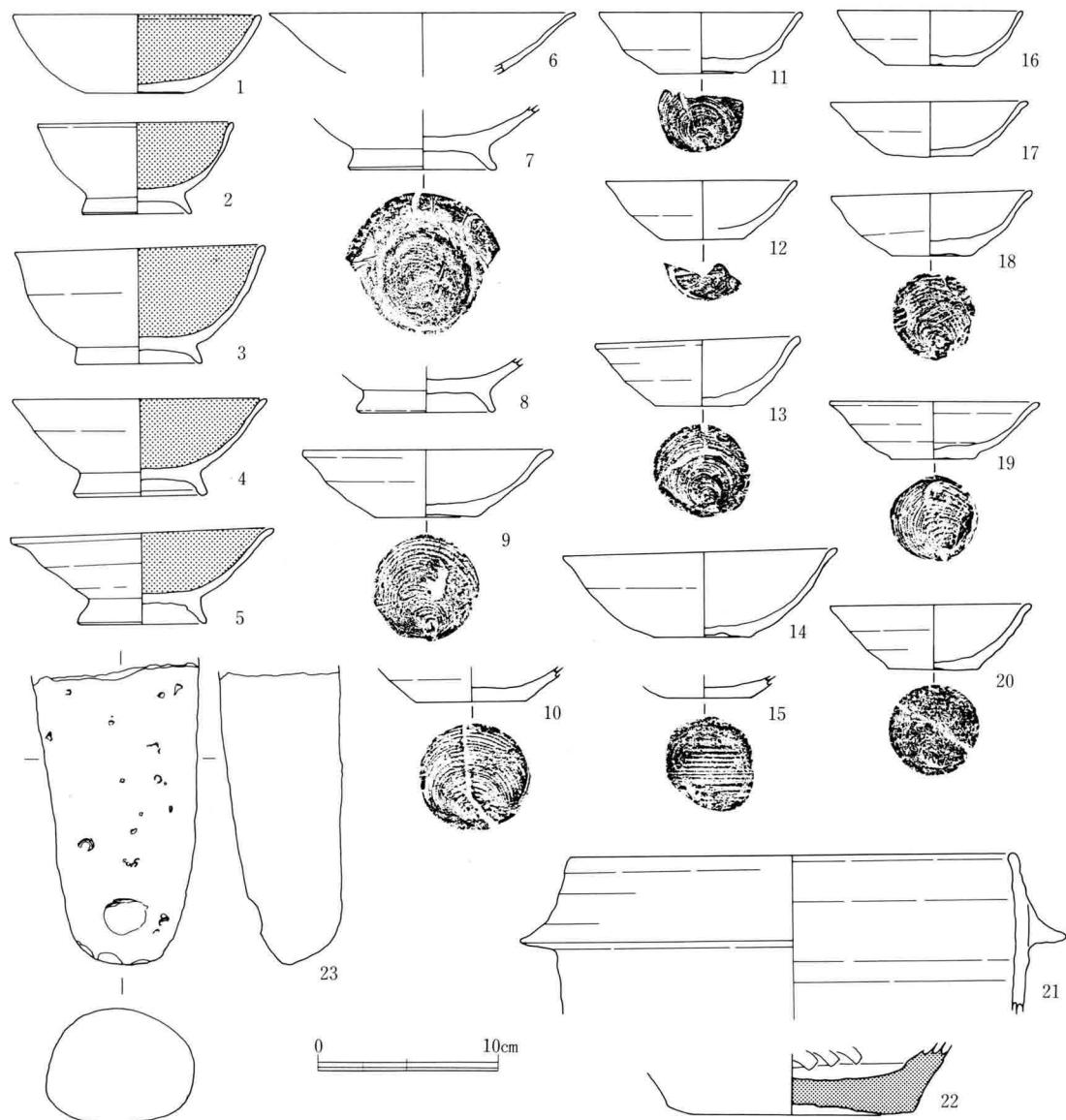
IV-19 A 6号住居址カマド、工作台石



IV-20 A 6号住居址カマド



IV-21 A 6号住居址南壁下配石



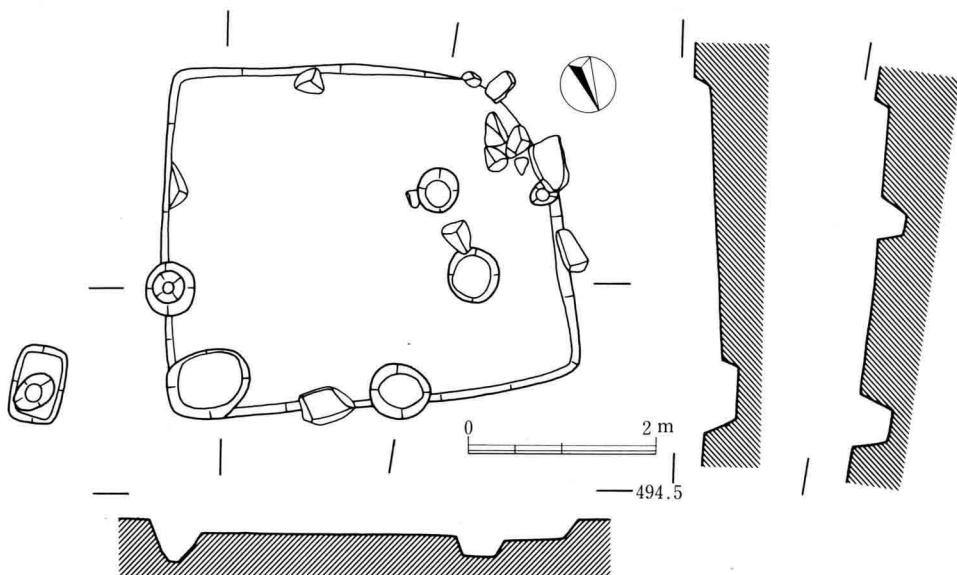
79図 A 6号住居址出土遺物実測図 (1 : 4)

近い土器はカマド周辺及び西壁下からの出土である。

遺物 (79・84図) 出土量は比較的多い。器種には土師器椀 (2~5・7・8)・壺 (1・6・9~20)・羽釜 (21)、須恵器甕 (23)、灰釉陶器椀がある。この他に安山岩の叩打石・刀子片 (84図11) が出土している。壺類のロクロからの切り離しは回転糸切り技法によるが、15は静止糸切りである。高台は断面三角形を呈するものを基本とし、接着の際に糸切り痕は消されるが、7には残存する。羽釜の鍔は全周し、器体はナデ調整である。

B 1号住居址

遺構 (80図、IV-22) 調査地の東側、戸口山支脈山麓緩斜面に位置する。遺物包含層中より大小の礫を含み、基盤層に大礫が露出する。図示した礫のほとんどは基盤層のものであり、沢筋に構築された遺構であるといえる。形態は南西隅部が大きく弯曲する不整長方形である。長軸は東西方向にあり、外法4.25m・内法4.05mを測り、短軸が外法3.65m・内法3.5mの規模になる。掘り込みは南壁20cm・北壁16cm・東壁12cm・西壁18cmである。床面は地形に応じて西・北方向へ傾斜を有し軟弱である。南西隅付近から炭化物の出土をみたが焼土は確認されない。カマドの構築はなかったものと思われる。住居址内及び東・北壁からピットが確認されるが小屋組配列にならない。



80図 B 1号住居址実測図 (1 : 80)



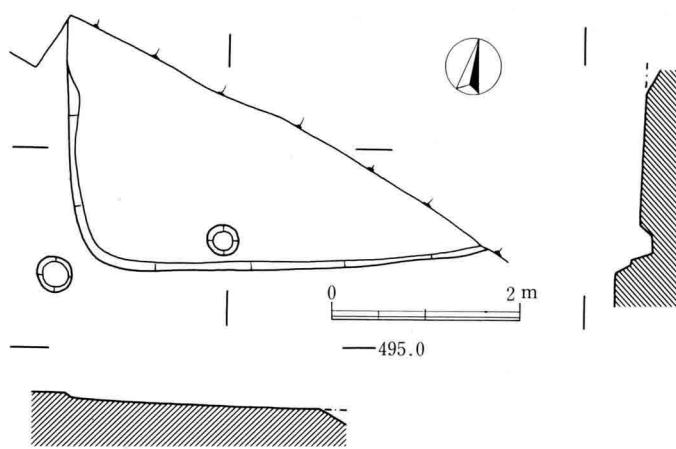
IV-22 B 1号住居址

遺物 少量出土したのみで、小破片が多く図上復元可能な土器片はない。器種には土師器内黒坏・坏・甕、須恵器蓋・坏・甕がある。

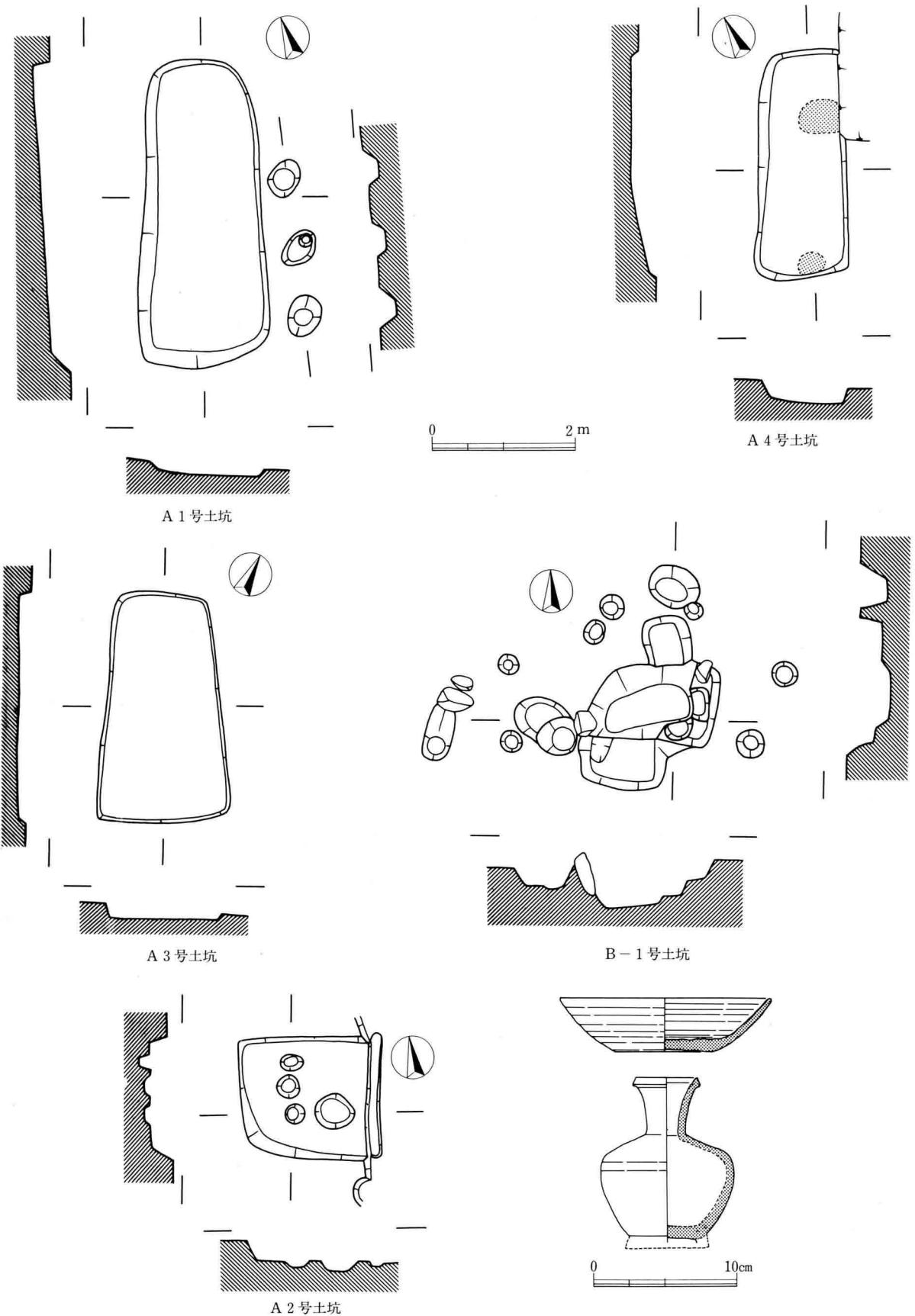
B 2号住居址

遺構 (81図) 調査地の東端に位置し、単独検出であるが北側半分程は果樹園造成の際に削り取られる。形態は隅丸方形になるものと思われる。規模は不明である。西壁の軸線はN15°Wを指す。掘り込みは南壁18cm・西壁4cmを測り、床面は東・北方向へ傾斜する。カマド等の施設は確認されない。

遺物 土師器坏・甕、須恵器坏が少量出土したにすぎず、図上復元可能なものはない。



81図 B 2号住居址実測図 (1 : 80)



82図 平安時代土坑実測図 (1:80), A 2号土坑出土土器実測図 (1:4)



IV-23 B 1号土坑

A 1号土坑

遺構（82図、IV-15） 調査地西端遺構群の一つで、緩斜面からの単独検出である。形態は隅丸長方形を呈し、長軸4.28m・東西軸1.65mの規模である。掘り込みは南壁26cm・北壁20cmで、底面は北に傾斜し軟弱である。遺物は少量出土しているにすぎなく、土師器坏、須恵器坏・高台付坏・甕の器種がある。

A 2号土坑

遺構（82図、IV-6） 調査地西端遺構群内にあり、古墳時代のA 2号住居址と重複関係にある。このため東壁側は不明である。形態は長方形を呈し、長軸は南北方向にあるが規模は不明である。短軸は1.7mを測る。西壁が32cm・南壁30cm・北壁28cmの掘り込みで、底面は地形に応じて傾斜する。遺構内にピットが4個ある。

遺物（82図） 遺物の出土量は少ない。器種には土師器坏・甕、須恵器坏(1)・小形長頸壺(2)がある。

A 3号土坑

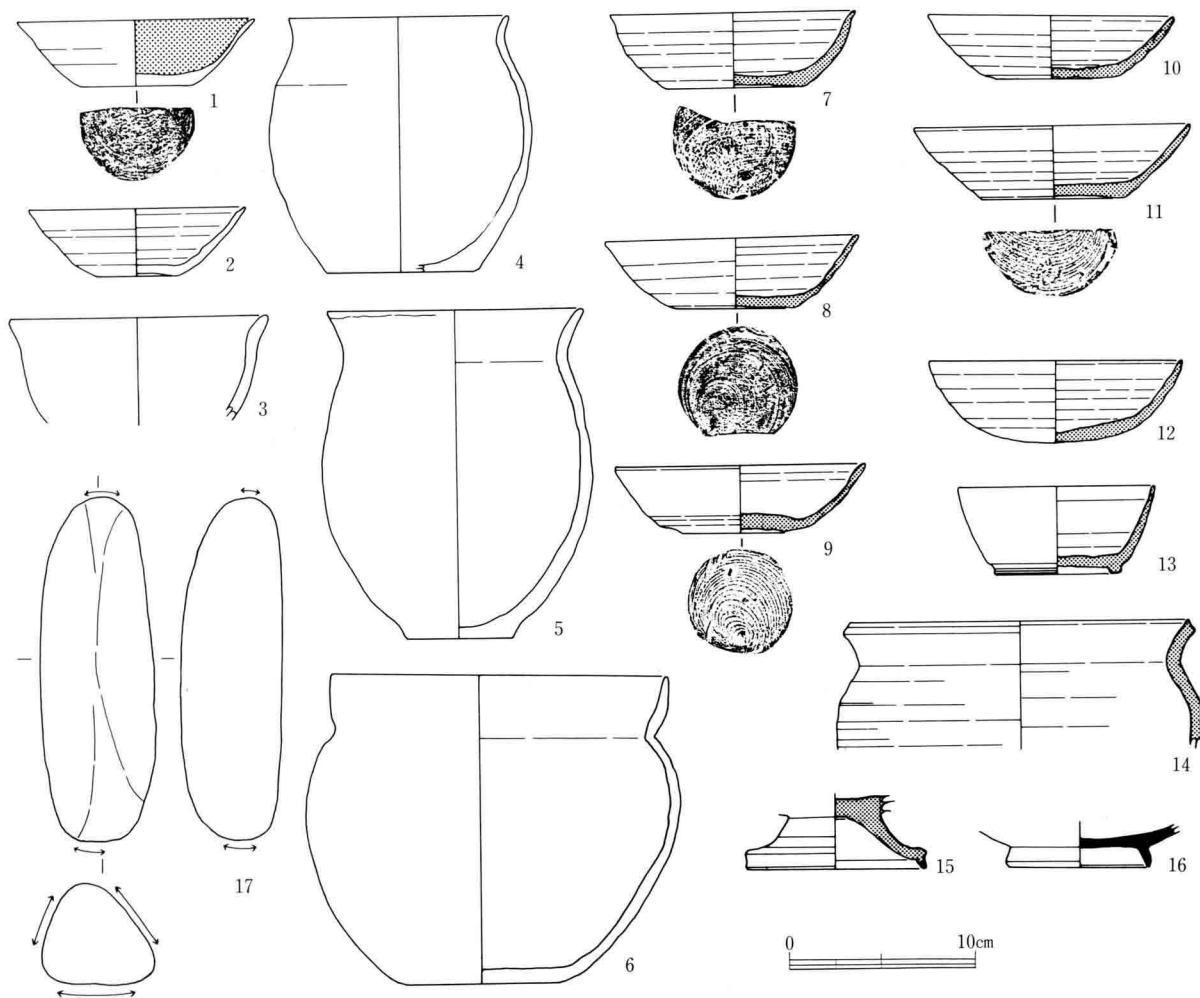
遺構（82図、IV-16） 平安時代の4号住居址覆土上部から検出した。形態は隅丸長台形状を呈し、長軸3.2m・東西軸南壁1.88m・北壁1.25mを測る。東壁8cm・西壁19cm・南壁11cm・北壁18cmの掘り込みで、底面は平坦である。遺物は土師器坏、須恵器の小破片を得たのみで、図上復元可能な土器片はない。

A 4号土坑

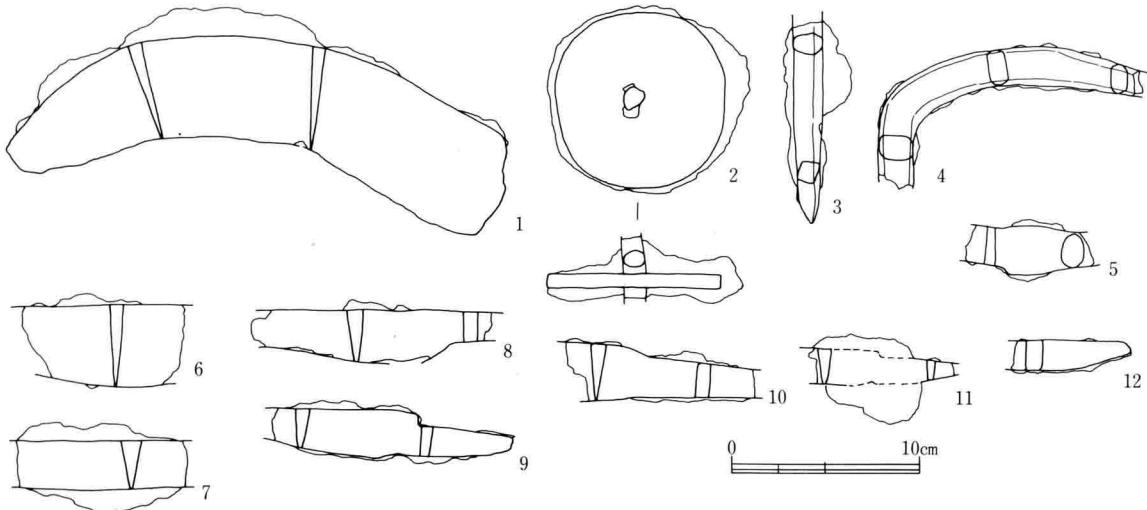
遺構（82図） 調査地西端の遺構群の一つで、単独検出である。形態は隅丸長方形を呈し、長軸3.15m・東西軸1.2mの規模になる。東壁20cm・西壁23cm・南壁12cm・北壁12cmの掘り込みで、底面は東へ傾斜し、南北は中央に向けて凹む。低面に2ヶ所火床が確認された。遺物は土師器坏・甕、須恵器坏の小破片が出土したにすぎない。

B 1号土坑

遺構（82図、IV-23） 調査地の東端に位置し、B 2号住居址と近接する。掘り上がりは幾つかの柱穴及び土坑が重複しているような複雑な形態になる。そのため規模等の計測は困難であるが、最深部は検出面から65cm程になる。遺物の出土は少量にすぎず、器種に土師器坏・甕がある。柱穴は方形配列にならない。



83図 グリッド出土遺物実測図 (1 : 4)



84図 鉄製品実測図 (1 : 4) <1 ASD 1, 3・8 ASB 1, 他グリット出土>

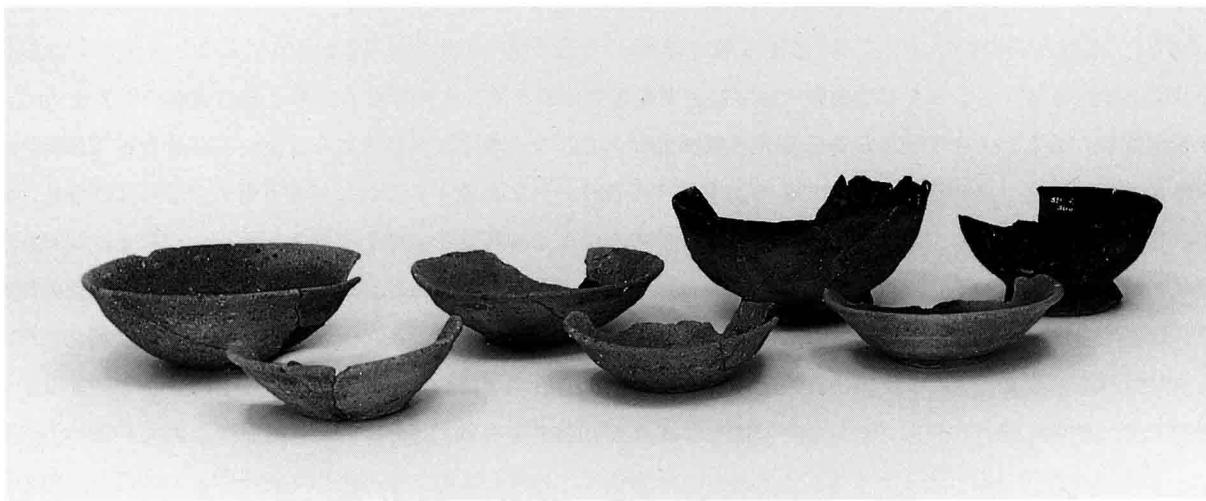
グリット出土土器 (83図)

遺構群が所在する近隣のグリットより、谷筋にあたるグリットからの出土量の方が多い。また山間高地よりのP・U・Vグリットからの出土量も多い。前者低地に位置するため斜面遺構からの廃棄、流れ込みと考えられるのに対し、後者は開墾時の破壊及び黒褐色土層内の遺構の存在が考えられる。また須恵器の出土量が多かったため、窯址の存在を考慮したが、それを裏付ける窯壁・焼き損じ品等見い出すことができなかった。

8 宮ノ下遺跡出土遺物觀察表

番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	調整等	法量(cm)			遺存	調整等
			口径	底径	器高			口径	底径	器高		
A 1号住居址 (71図)												
1	土師器	甕	22.0			1/10	ナデ					
2	"	"	26.5			1/10	ハケナデ・ナデ					
3	"	"		7.5		1/3	" · "					
4	須恵器	蓋	14.4		2.7	1/4	ロクロ・ヘラケズリ					
5	"	"	14.4		2.2	1/5	" · "					
6	"	"	15.1		1.7	1/9	" · "					
7	"	坏	13.0			1/5	" · ヘラキリ					
8	"	"	13.3	7.0	4.0	3/4	" · "					
9	"	"	13.0			1/5	" · "					
10	"	高台付坏	10.3	6.6	4.9	1/4	" · ヘラケズリ					
11	"	"	16.7			1/5	"					
12	"	短頸壺	4.3			1/6	"					
13	"	"				1/4	" · 自然釉					
14	"	甕		15.4		1/10	ナデ					
15	砂岩	磨石										
A 2号住居址 (61図)												
1	土師器	坏	13.4	11.6	3.7	1/2	ヘラミガキ・内黒					
2	"	"	14.6		6.0	1/4	" · "					
3	"	"	15.0			1/10	" · "					
4	"	"	16.8		6.7	完	"					
5	"	甕	15.5			1/10	ナデ					
6	"	"		6.2		"	"					
A 3号住居址 (63図)												
1	土師器	坏	18.6		8.7	2/3	ヘラミガキ					
2	"	甕		9.0		1/10	ナデ					
3	"	"				1/5	" · ハケナデ					
4	"	"				1/2	" · "					
A 4号住居址 (77図)												
1	須恵器	蓋	13.9		2.8	1/2	ロクロ					
2	"	坏	12.6	6.6	4.0	1/2	" · 糸切り					
3	"	高台付坏	9.7			1/2	" · " · ヘラケズリ					
4	須恵器	高台付坏	10.0					1/4	ロクロ			
5	"	"	10.7					1/2	" · 糸切り・ヘラケズリ			
6	輕石											
A 5号住居址 (65図)												
1	土師器	坏	14.8					1/5	ヘラミガキ・内黒			
2	"	"	12.8					1/4	"			
3	"	"	14.4					1/5	"			
4	"	甕	13.6					1/8	ヘラナデ・ナデ			
5	土師器	甕	13.6					1/10	" · "			
6	"	"			7.0			1/8	"			
7	"	"	17.8					1/2	ヘラミガキ・ハケ・ナデ			
A 6号住居址 (79図)												
1	土師器	坏	13.7	5.8	4.3	1/3	ロクロ・内黒・糸切り					
2	"	椀	10.8	6.0	5.0	7/8	" · "					
3	"	"	13.8	7.0	6.3	"	" · "					
4	"	"	14.0	7.7	5.4	1/9	" · "					
5	"	"	14.5	7.0	5.0	1/2	" · "					
6	"	坏	16.8					1/4	"			
7	"	椀		8.1				1/3	" · "			
8	"	"		7.7				"	"			
9	"	坏	13.8	5.8	3.7	7/8	" · "					
10	"	"		6.0				1/3	" · "			
11	"	"	11.1	4.8	3.4	"	" · "					
12	"	"	10.4	4.4	3.3	"	" · "					
13	"	"	11.2	5.0	3.6	1/2	" · "					
14	"	"	10.2	5.0	3.0	"	" · "					
15	"	"		5.0				1/6	" · 静止糸切り			
16	"	"	10.7	4.7	3.1	2/3	" · 糸切り					
17	"	"	15.0	5.4	4.7	完	" · "					
18	"	"	11.0	4.3	3.5	2/3	" · "					
19	"	"	11.4	4.7	3.2	"	" · "					
20	"	"	11.0	5.0	3.6	1/2	" · "					

番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	調整等			番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	調整等		
			口径	底径	器高		口径	底径	器高				口径	底径	器高		口径	底径	器高
21	土師器	羽釜	24.3			1/7	ナデ			2	須恵器	高台付壺	4.2	4.7	11.4	完	ロクロ・高台欠損		
22	須恵器	甕	13.5			1/10	外面タキメ・ナデ												
23	軽石																		
A 5号土坑 (69図)																			
1	土師器	高壺		17.8	(10.0)	1/2	ヘラミガキ・ナデ												
A 1号溝址 (73図)																			
1	土師器	壺	13.0			1/6	ロクロ・内黒			1	土師器	甕	20.4			1/4	ヘラナデ・ハケ・ナデ		
2	須恵器	蓋	14.4		4.2	1/5	"・ヘラケズリ			2	須恵器	蓋	12.8		4.9	2/3	ロクロ・ヘラケズリ		
3	"	壺	11.2			1/6	"			3	石器	砥石	長17.5	幅8.5			全面使用		
4	"	小形壺		2.9		1/2	"・糸切り			4	"	敲打器		幅8.0			先端使用		
A柱穴群1 (75図)																			
1	須恵器	蓋	13.0			1/4	ロクロ・ヘラケズリ			1	土師器	壺	12.7	6.0	3.5	1/2	ロクロ		
2	"	"	14.6			1/3	"・"			2	"	"	11.5	4.1	3.7	1/3	"		
3	"	"	16.4			1/6	"・"			3	"	"	14.0			1/6	"・内面ヘラミガキ		
4	"	"	17.3			1/2	"・"			4	"	甕	11.7	8.2	13.7	1/5	ナデ		
5	"	"				1/4	"・"			5	土師器	甕	13.6	5.8	17.6	2/3	ナデ		
6	"	"				1/4	"・"			6	"	甕	18.0	9.0	16.4	3/4	"		
7	"	"				1/4	"・"			7	須恵器	壺	13.0	7.2	4.0	1/4	ロクロ・糸切り		
8	"	壺	13.6	8.6	4.6	1/2	"・ヘラキリ			8	"	"	13.4	6.4	3.8	1/2	"・"		
9	"	"	14.0	7.4	4.2	2/3	"・"			9	"	"	13.2	5.5	3.7	1/2	"・"		
10	"	高台付壺	12.7	9.1	4.1	1/4	"・ヘラケズリ			10	"	"	13.1	7.5	3.4	1/2	"・"		
11	"	高壺				1/4	"			11	"	"	14.6	7.6	4.0	1/2	"・"		
A 2号土坑 (82図)																			
1	須恵器	壺	14.6	6.8	3.8	1/3	ロクロ・糸切り			12	"	"	13.4	8.6	4.4	1/4	"・ヘラケズリ		



IV-24 A 6号住居址出土土器

V ま と め

1 猪平遺跡

猪平に初めて人類の足跡を残すのは今から8000年程前の縄文時代早期からである。それ以降晩期まで少量の遺物を残すことによってその存在をアピールするかの様である。調査では性格不明の不整形な土壙を検出したのみで、一定期間の定住を意味する住居址等の生活遺構は確認されない。土掘り道具の打製石斧が3点出土しているのに対し、狩猟具として打製石鎌が数において圧倒的に多い。縄文時代の猪平は自然植物食料の採集地であり、鳥獣等を捕獲する狩場であったのである。また少量の土器の出土は前記した行為のための一時的キャンプ場であったことを裏付ける。

弥生時代では太形蛤刃石斧、磨製石鎌が各1点採集されているが、今回の調査では遺構・遺物共に検出されない。この形態の石斧は弥生時代中期の伐採用具として考えられており、猪平に於ては単純に樹木伐採の際の落し物と推測しておく。石鎌もまたしかりである。

古墳時代も弥生時代同様生活址が確認されないが、猪平溜池の北西斜面から滑石製勾玉・変形の管玉各1点が採集されている。湧水地と約50m程離れた下方に位置するため水靈信仰との係りある遺物と思える。沖積面の集落から代表者が水源まで登り詰め水神に感謝の祭りを行なったものと想像している。

猪平が俄に活況を呈するのは平安時代でも中頃からである。ただし千曲川の沖積地に及びもつかない小規模なものである。住居址は全て単独検出で、住居址どうしが重複関係にあるものはない。それ故に大規模集落では把握できない住居形態、集落形成等基礎構造が見える可能性が高い。形態は、調査地東側の傾斜の緩い平坦地に占地する6号～8号・12号住居址は方形に近く、これに対し緩傾斜面にある他の住居址は等高線上に長軸を合せた隅丸長方形態となる。カマドも標高の高い壁の隅部に構築しており、直下に周溝を掘り込むという共通性がある。カマドは石芯製両袖形態のものであるが、11号住居址のものは東壁から南壁方向へ煙道を角礫の高架をもって曲げ、住居内に煙道を長く造り出す珍しい事例である。暖房等の効果を期待したものであろうか。カマドの位置は2号・7号・8号住居址が壁の中央付近に構築されるのに対し、他の住居址は隅または隅付近に壁より突出した形でつくられる。方位から見ると東壁右隅に構築され、南壁左隅に移設するもの（6号・11号）、南壁左隅のもの（10号）、西壁左隅のもの（1号・3号～5号・12号）、西壁中央のもの（8号）・北壁中央のもの（7号）、東壁中央のもの（2号）とまちまちである。地形に合さず構築位置を頑強に主張していると思えるものに2号・6号・7号住居址がある。カマド位置にある程度の規格性があるのなら風向が考慮されようが、この場合沖積面からの吹き上げ風が想定され、西壁に構築するのが有効である。これに合致するのは12軒中6軒の半分にすぎない。地形により規制されていることは確かであろうが、その上に何かの要素を加味しないと説明がつかない。緩斜面の住居址は長方形態になることは前述した。それは地形によるものと考えられ、斜面故に方形の竪穴住居址の掘り込みが不可能で、床面積確保のためには横方向への拡張を余儀なくされたものと考える。では何故に斜面に構築しなければならなかったのであろうか。6号～9号住居址付近の平坦地における柱穴状のピット群との係りから想定して、物置小屋等の何らかの建物が存在し、ここが作業の中心地ではなかつたかと思う。また斜面の方が排水、小屋組に有利であったことも考えられる。こう考えてくると、7号・8号住居址がカマドの位置から他の住居址より先行して構築された可能性が高い。この両住居址が廃絶後、柱穴群が形成されたものと考えるが、6号・

9号住居址との前後関係は不明である。位置的に考えると、3号・4号住居址、5号・6号住居址、9号・12号住居址、10号・11号住居址の2軒1対の同時存在が予想されるが、1号と2号住居址の関係は不明である。遺物から時間差を想定することは、出土量が少量であり、重複関係にある遺構が存在しないことから困難である。また各種土器間においても形態差を見い出すことができない。それぞれの構築時期に土器形態の変化が起こらない時間差の短期間の存在と考えられる。柱穴群1は2号住居址と、柱穴群3は12号住居址と所在位置からみて関係ある掘立柱建物址と予想する。次に生業の面から考える。5号住居址から小鍛冶炉を伴う製鉄遺構が確認されている。廃棄物穴から多量の熔滓等が出土しており、貯水穴・鉄床台石の存在は鍛鉄から鉄製品作りまで行なった様相がうかがえる。山間部まで来て鉄製品作りはなかろう。何かを作る道具製作のためと考えるならば、木製品作りが浮かぶ。掘立柱建物址は作業小屋兼木地乾燥小屋と考えれば、その存在意義が見い出される。3号・4号・8号・12号住居址から検出された工作台石の用途は樹木の纖維を得るために叩台と考えられるが、カマド近辺にあることが気にかかる。ことほどさように平安時代も山との係りが相当深かったことが推測される。出土遺物は少量にすぎず、それも破片出土が多い。本製品の所持を考慮に入れても短期間の居住を意味しているものと考える。土器類は土師器什器を主体としており、須恵器は壺・蓋各1点・甕6点・四耳壺1点が出土したにすぎない。須恵器生産の消滅と使用の激減期に入っているが、これに替り灰釉陶器の出土が目立つようになる。土師器壺には小形皿形のものが出現し、椀における器形も灰釉陶器の模倣が認められる。また甕の減少と羽釜の出土等から10世紀後半から11世紀にかけての年代を求める。

2 宮ノ下遺跡

更科カントリー造成事業に伴う試掘調査及び本調査が実施される以前は、開発地が遺跡として認知されていなかった。それは北斜面に位置するという理由からであったが、調査所見からは聖川対岸の南斜面より、日照時間が短く、鉄鉋水からの災害を受けやすい等不利な条件があるが、前面に水田可耕地を有し、沢からの飲料水も枯渇することなく流下している点では有利な面がある。そのため縄文時代から平安時代にかけての遺構・遺物が残されているとも言える。

縄文時代では前期から晩期までの土器・石器類が出土しているが、遺構は確認されていない。出土地は東側微高地からのものが多く、谷筋にあたるグリットからも出土する。猪平遺跡と同様調査地外に遺構の存在を求めるのが妥当であるのか、一過性のキャンプ的な方を示しているのかの問題について更に検討を要する。ただし、調査地より奥まった戸口山麓は急勾配を有する様になり、日照も悪く遺構の存在がないものと考える。

次に宮ノ下に生活の跡を残す時代は古墳時代である。住居址及び土壙が検出されているが、重複関係にあるものが多く、その全容を知るものは少ない。形態は一様でなく、規格性のある柱穴も確認されず、B3号住居址のように火床または焼土が認められないものもあり、住居址と認定して良いか迷う。遺構からの所見ではA3号住居址が地床炉で、A2号住居址がカマドが構築されていた可能性がある。事実ならばA3号住居址が先行する遺構である。遺物からはA5号土壙出土の高壺が古い形態を呈し、善光寺平第II様式に比定され、田ノ口大塚古墳との関連性が今後の検討課題となろう。他の遺構は古墳時代後期の第III様式の位置が与えられようが、A3号住居址の地床炉の存在が気になる。A2号住居址と重複関係を考慮すると遺物の混乱があり、あえて古い要素の土器を抽出するとA2号住居址出土の甕をもってあてる。これらの古墳時代の遺構・遺物は田ノ口盆地に於ける最初のものであり、前面南斜面の藤塚古墳群等との係りを検討する資料になる。

奈良時代の遺構は少なく、住居址・溝址・柱穴群各一つを検出した。溝址は住居址の残存形態と考えられ、柱

穴群そのものは後出の遺構の可能性もある。A 1号住居址は戸口山々麓東斜面の地形変換点に掘り込まれ、床面積23.2m²を推定する大型住居址である。カマドはA 6号住居址により破壊を受ける他はほぼ全容を露呈した。この住居址の特色は標高の高い西壁下から南壁下・東壁を経て北東隅部から屋外に延びる排水溝が掘られることと住居址中央に小鍛冶炉があることである。また南・東壁の周溝内に大形の柱穴があり、4個方形配列の主柱穴と合せた特種な小屋組構造が予想される。標高の高い壁下の周溝は古墳時代の遺構にも認められる。小鍛冶炉の火床は還元化しており轍によるものである。鉄製品所持を裏付け、特異な階層者の家屋と考えられる。出土遺物は須恵器が目立つが、土師器の出土量も多い。床面及び直上出土の坏類底部はロクロからの切離をヘラ起し技法による痕跡を残す。回転ヘラケズリ技法もみられるが、糸による切離痕はない。

平安時代では4軒の住居址と4基の土壙が確認されているにすぎない。奈良時代のA 1号住居址同様の周構のあり方を踏襲するが、西壁から北壁下に掘り込み、A 4号住居址ではカマド前面を掘り抜く等特異なあり方を示す。また猪平遺跡では標高の高い一壁下に認められるのに対し、排水遺構と明確に推測できる点相違がある。A 6号住居址は北へ拡張し、猪平遺跡の斜面上の住居址と同様最終形態を長方形にしている点注意される。合せてカマドも標高の高い左隅部に構築され、工作台石が据えられる点も同様である。時期的にも合致し、猪平への谷筋道が現在でも存在していること（2図）を考え合せれば、山地の猪平遺跡と平地への接点となる宮ノ下遺跡との関連性が浮かぶ。宮ノ下遺跡に於る平安時代遺構の時期はA 4号住居址が最も古く9世紀前半に比定する。カマドは北壁の中央に構築され、出土土器類では須恵器が依然多く、高台付坏底部外面に糸切り痕を有するものと全面を回転ヘラケズリを施すものがある。A 2号土壙もこの時期にあてる。B 1号・2号住居址は出土量が少なく時期認定は困難であるが、須恵器の坏等が認められることからA 4号住居址と同時もしくは後続するものと考える。A 6号住居址はカマドが隅部に移行し、須恵器什器の出土がなく、代って灰釉陶器が認められ、土師器碗が増加し、羽釜を伴出する等猪平遺跡の後出の住居址群と同じ頃の11世紀前半に比定する。A 4号住居址のカマド前面の配石は単に排水溝確保のためと考えるが、A 6号住居址の南壁下の配石列の意味は不明である。

調査に臨んで、猪平遺跡・宮ノ下遺跡は簡単な内容を持つ遺跡と判断していたところであるが、注意深く観察すると遺構や遺物に新知見があり、特に奈良・平安時代の山の民としての生活を垣間見ることが出来る重要な遺跡であることが判明した。ちなみに猪平遺跡での平安時代住居址は今回調査した以外には地形等からないものと思料される。

報告書抄録

ふりがな	いのたいら みやのした							
書名	猪平遺跡・宮ノ下遺跡							
副書名	更科カントリークラブ造成事業に伴う緊急発掘調査報告書							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第60集							
編著者名	矢口忠良・綿田弘美							
編集機関	長野市教育委員会埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-22 長野県長野市小島田町1414 TEL 0262-84-0004							
発行年月日	西暦1994年3月25日							
印刷製本	ほおづき書籍株							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °〃	東経 °〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
いのたいら 猪平	ながの けんなんがの し 長野県長野市 しのの いしおざき 篠ノ井塩崎 あさいのたいら 字猪平776他	20201	E-030	36度 32分 36秒	138度 5分 39秒	19921001 ～19921215 19930426 ～19930606	1500	更科カントリーク ラブ造成事業に伴 う事前調査
みやのした 宮ノ下	ながの けんなんがの し 長野県長野市 しんこうまちあかだ 信更町赤田 字向山1811-イ他	20201	D-051	36度 33分 25秒	138度 5分 36秒	19930405 ～19930423	440	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
猪平	集落跡	縄文 平安 近世	土坑 竖穴住居 掘立柱建物跡 土坑 掘立柱建物跡	8基 12軒 3棟 8基 1棟	石鎚・打製石斧 土師器・灰釉陶器 羽口・鉄滓・ 軋元通宝		豊穴住居1軒に小鍛冶遺 構	
宮ノ下	集落跡	縄文 古墳 奈良 平安	竖穴住居 土坑 竖穴住居 " " 土坑	4軒 1基 2軒 4〃 5基	土師器・須恵器 鎌・刀子		遺構なし 住居内に小鍛冶炉	

長野市の埋蔵文化財第60集
いのたいら みやのした
猪平遺跡・宮ノ下遺跡

平成6年3月19日 印刷
平成6年3月25日 発行

編集長野市教育委員会
発行長野市埋蔵文化財センター
印刷ほおづき書籍株式会社